第３章　地域共同研究センター棟地点の調査成果

第１節　層　　序

調査区の基本層序は第20図に示したとおりである。調査区の北面（Ａ－Ｂライン）は、調査直前に解体された建物部分にかかっているので、上層部分の撹乱層が激しく、西面（Ｃ－Ｄライン）において比較的良好な遺存状態を保っていた。西面を基準にして上層部分の概要を述べると、現地表面は標高1.3ｍ前後にあり、表面はコンクリートで覆われているが、その直下80㎝まで（標高0.5ｍまで）は工学部の建築工事に伴う客土および撹乱層であった。工学部実習棟の試掘調査時に確認された徳島高等工業学校新設時の造成土と考えられる均質な粗砂の堆積は、この撹乱層の下に20～30㎝の厚さで認められた。この砂層下面の標高は、平均60㎝である。この砂層より下方はすべてシルトの堆積ないしシルトが混じり粘性を帯びた細砂・中粒砂層であり、４～５㎝単位で色調が異なる薄い互層状のシルト層を挟んで、その下から近世の遺構が検出された。なおこのシルト層の最上層にあたる互層状の堆積について、調査時点では近世の造成土ではないかと推定したが、第４次調査以降、同様の堆積は明治期の耕作土として普遍的な様相であることが判明した（第４章第１節で解説）。

近世の遺物包含層については、土坑18以外の遺構が関与しない北面（Ａ－Ｂライン）を基準に概要を示すと、最上層は灰色砂層であり、一部明治期の耕作土を含む。標高は25㎝から10㎝前後までである。中層は黄褐色（暗オリーブ灰色）シルト混じりの細砂層であり、その下面は、調査区の西側から東側にかけてわずかに下降する。東側のもっとも深い部分で標高値を示すと、14㎝からマイナス12㎝であり、25㎝程度の厚みをもつ。下層は黄褐色（暗オリーブ灰色）シルト混じりの中粒砂層で、中層の下面から、掘削限界となったマイナス40㎝までの厚さを確認できた。これより下層は地下水の湧水のために調査を断念した。なお、これら包含層から出土した遺物については、最上層のものを灰色砂層、中層のものを黄褐色シルト層上層、下層のものを黄褐色シルト層下層出土とする。

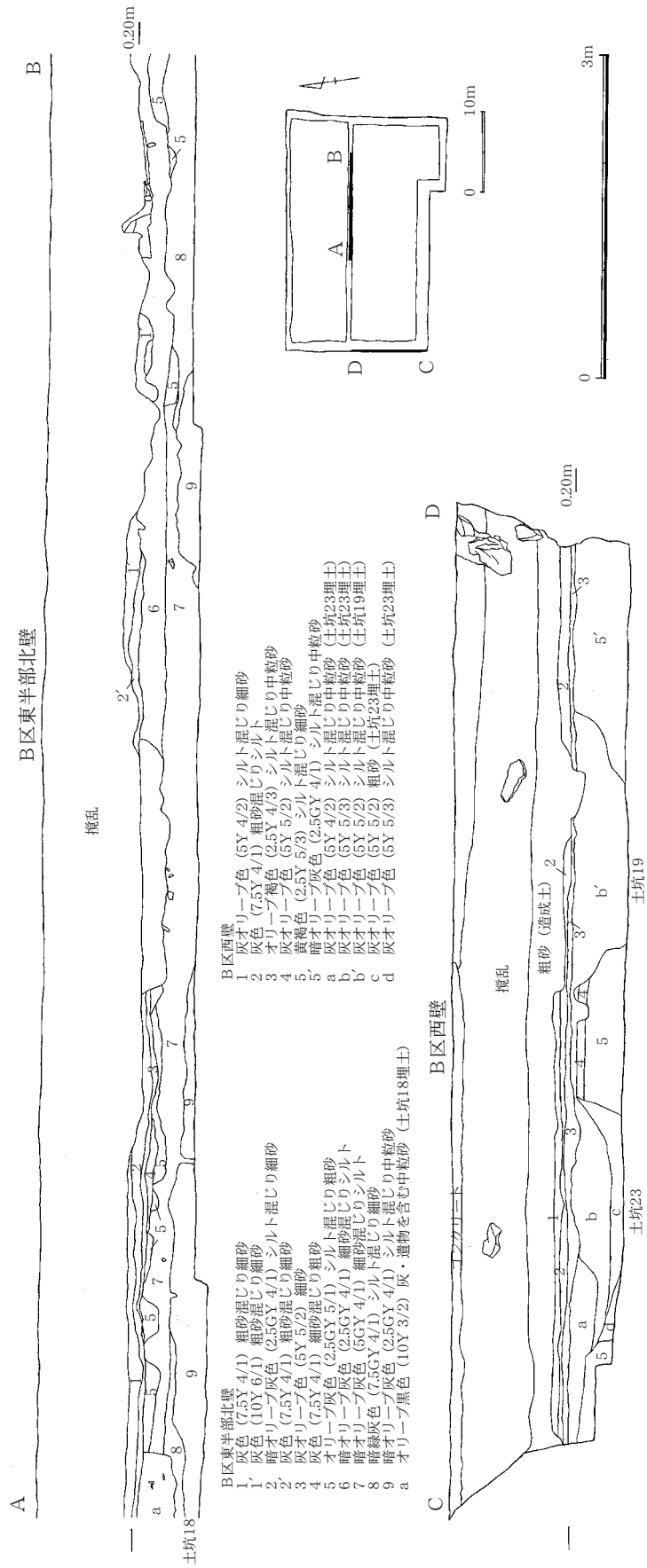
第２節　遺　　構

１．遺構の概要

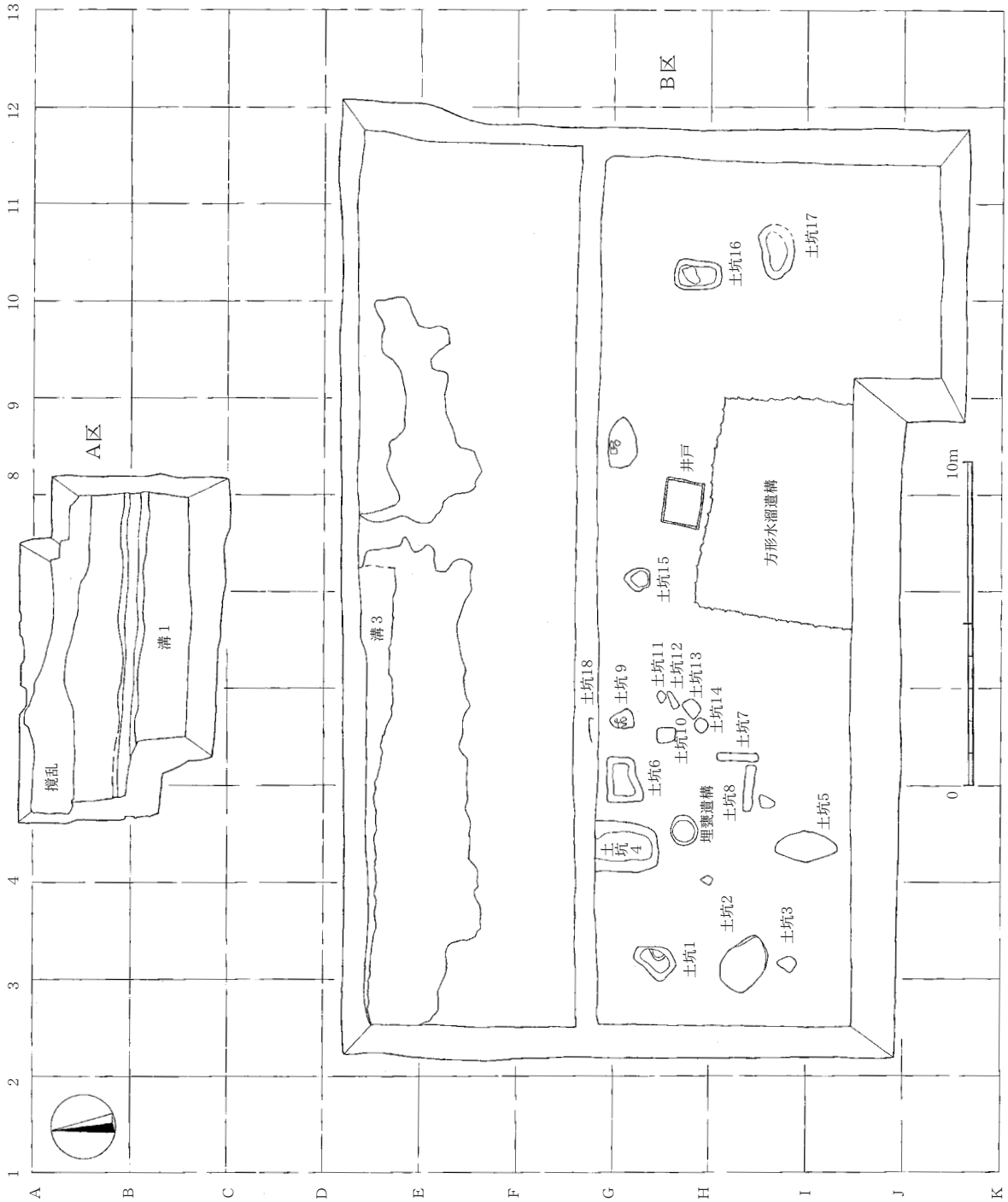
第１章で述べたように、調査区は共同溝建設予定地（Ａ区）と本棟建設予定地（Ｂ区）の２箇所に分かれており、後者については、その北側半分が旧校舎解体部分（拡張部）にあたり、南側半分が旧中庭部分である。こうした事情から、旧校舎解体部分の遺構遺存状態は非常に悪く、ごく一部が調査可能であったにすぎない。このような制約のもとで調査を進めたが、確認された遺構面はおおまかに２面に分けられる。それぞれの遺構面から検出された諸遺構を列挙すると次のとおりである。

第１遺構面（18世紀後半から19世紀代、一部に17世紀代のものを含む）

井戸１基・方形水溜遺構１基・埋甕（便所）遺構１基・溝３条・土坑18基



第20図　地域共同研究センター棟地点の基本層序（縮尺：１／60）



第21図　地域共同研究センター棟地点第1遺構面検出遺構配置図（縮尺：1／200）

第2遺構面（17世紀後半から18世紀中頃、一部に19世紀代のものを含む）

柱穴2基・溝1条・土坑29基

遺構の配置関係は、遺構面ごとに分けて第21図と第25図に示した。絵図面を検討した結果、佐野家は19世紀代まで屋敷替えを経たとの記録を見いだせない。したがって検出された遺構は、いずれも佐野家拝領屋敷および当該地区におけるその後の土地利用にかんする諸施設と推定され、江戸期については屋敷の北半部が代々どのように利用されてきたのかの概要を知ることができる。以下、上層の第1遺

構面で検出されたのものから、順次概要を報告していく。なお土坑については、浅い掘り込みで性格の判然としないものを省略し、堆積状況が明確で性格が把握できたものを取り上げることとする。

2. 第１遺構面（第21図、図版第８－５・６）

１）井戸（第22図、図版第９－１）

Ｇ－７・Ｇ－８グリッドで検出された、木枠を用いた平面方形の井戸である。検出面において南北100㎝、東西110㎝の平面規模をもち、北側が若干狭くなる台形を呈している。井戸の底面がどれほどの深さをもっていたのかについては、地下水の湧水が激しく厳密には確認できなかった。しかし井戸枠の内側を標高値に換算してマイナス0.40ｍまで掘り下げたところで砂層に到達するので、このあたりで底面になる可能性が考えられ、比較的浅い井戸であったと判断した。各辺には幅15㎝、長さ１ｍ前後の板材を８枚から９枚立て並べて配し、その内側に長さ90㎝、幅20㎝前後の角材をあてがって井戸枠としている。なお４辺に渡された角材の接合には断面円形の鉄釘が用いられている。

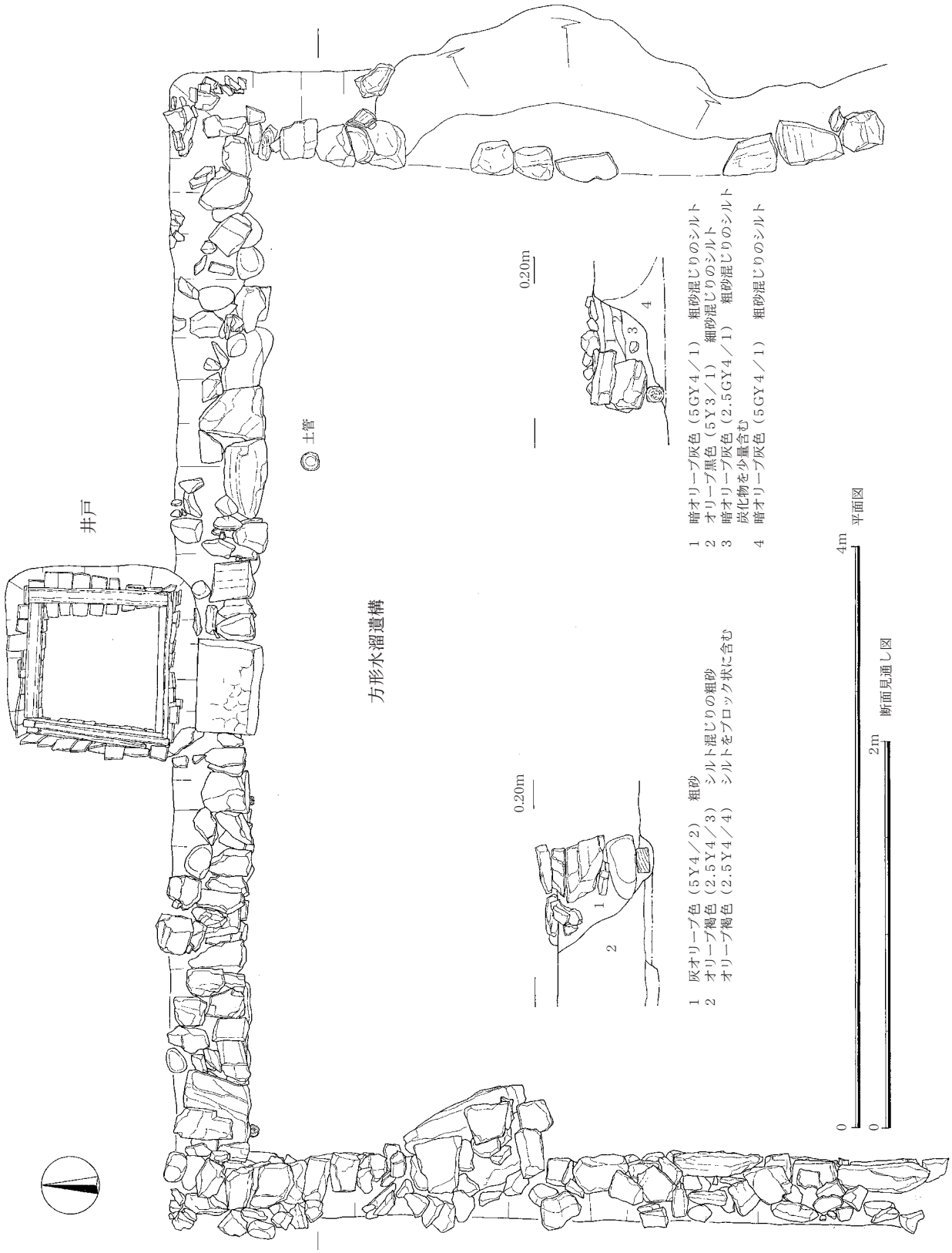
井戸の南辺は次に述べる方形水溜遺構の北辺中央付近にあたり、方形水溜遺構の石組みの掘方を一部切って掘削されている。そのいっぽう、この井戸は方形水溜遺構の北辺と平行に設置されており、かつ方形水溜遺構のほぼ中央に位置している。これらの点を考慮すると、井戸は方形水溜遺構の構築より新しい掘削であるものの、方形水溜遺構と井戸は一時期同時に使用された可能性がある。

掘方埋土中からの出土遺物には瀬戸・美濃系磁器や焙烙、瓦片（217）があり、井戸内埋土からの出土遺物には肥前系京焼風陶器碗（83）がある。これらの遺物はいずれも19世紀代のものである。木枠を用い、断面円形の釘を使用する井戸枠の構造からみて、構築年代としては19世紀後半以降のものと考えられ、明治期に属する可能性が高い。

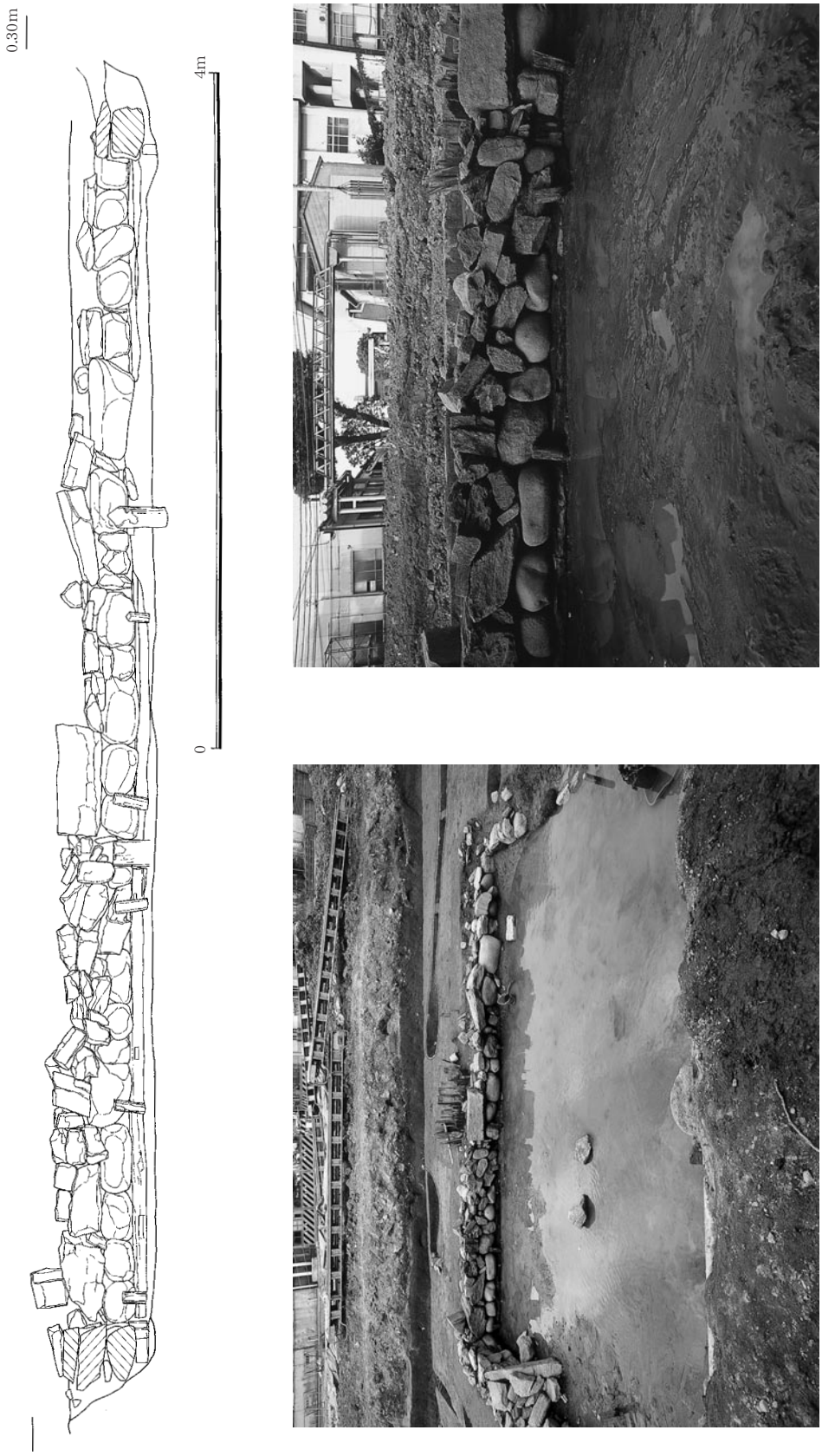
２）方形水溜遺構（第22・23図、図版第10）

Ｈ・Ｉ－６からＨ・Ｉ－９にかけての範囲で検出された、平面方形をなす水溜遺構である。南半部分は調査区の外側となり、未検出であるが、北辺全体と東西両側辺の約５ｍの範囲を検出できた。北辺の状況に即して構造を述べると、掘方は長さ7.8ｍ、深さ60㎝をはかる。底面の標高はマイナス0.42ｍである。この掘方は内側に向かって50度前後の勾配をもっており、その下面には幅20㎝、深さ10㎝前後の溝状の掘り込みをもつ。この掘り込みは石組みの礎盤となる角材を据え付けるためのものであり、掘り込み内には長さ１ｍ50㎝～２ｍ、幅ないし厚みはいずれも10㎝前後の角材が全周に隙間なく並べられている。角材の中には建築材からの転用と思われるものも含まれており、北辺西半に用いられた角材には２箇所に枘穴が穿たれていた。さらにこの礎盤が内側にずれ込むのを防ぐために木杭が打ち込まれており、北辺については１ｍ前後の間隔で５本が打ち込まれていることを確認できた。他の辺も基本的には同一の構造をとっている。

こうした礎盤と杭が基礎となって、その上に石組みが垂直に構築されており、北側の内法で6.8ｍをはかる。石組みには結晶片岩の角礫と砂岩の円礫が用いられており、長さ30～40㎝、幅50～60㎝前後の寸法の石材を２段に構築したうえで、その上に扁平な石材を配し石組み上面の高さを揃えている。都合３段（場所によっては４段）の石積みとなっているが、このうち最下段には主として円礫を用い、それより上には角礫を用いるといった明確な選択性が認められる。この最下段より上に用いられる角礫は



第22図　方形水溜遺構・井戸実測図（平面図縮尺：1／40、断面見通し図縮尺：1／30）



第 23 図　方形水溜遺構立面実測図・写真（縮尺：１／40）

短辺を内側に向ける小口積みが基本となり、表側の面を揃えている。また石積みの最上面には掘方の肩までを石材で覆う格好で、扁平な石材が控え積み状に置かれている部分もあり、見かけ上は裏込めがあるかのように仕上がっている。比較的端正なつくりである。こうした造作が印象深かったために、調査時には屋敷内の苑池ではないかと推定した。

方形水溜遺構の内部には泥の堆積が認められ、この堆積の内部から各種の遺物が出土した。それを除去すると砂層になり、この砂層が床面であったと考えられる。砂層上面の標高はマイナス0.42ｍであり、これを床面とするならば、石垣の上端までの深さは50㎝前後となり、浅い水溜遺構であったと考えられる。ただし湧水の関係で、断面観察はできていない。

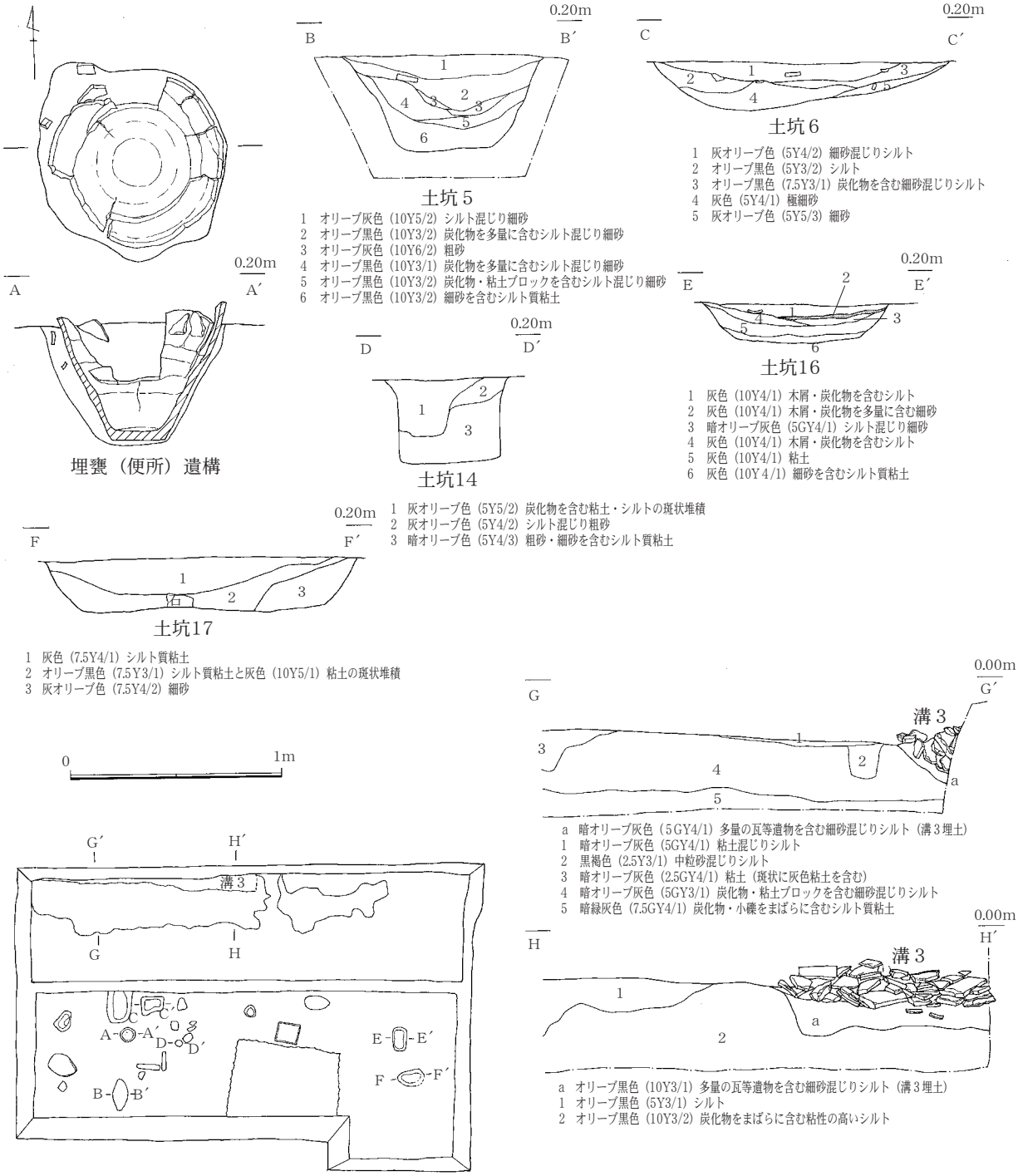
また印象深い造作として、方形水溜遺構の北東側（Ｈ－８グリッド）、北辺石垣から30㎝、東辺石垣から２ｍ８㎝のところに土管を垂直に突き刺した状態の施設が検出された。この土管は長さ40㎝前後で斜めに打ち割られており、傾斜面を水溜の内側に向けているため、取水口のようにみえる（図版第10－５）。このことから、この土管は外部への排水ないし導水管の役割を果たした可能性が想起された。ただし土管の下がどのような構造になっているのかを手探りで探ってはみたものの、いかなる施設があったのかは確認できなかった。

方形水溜遺構の内部からは、陶磁器類を主体とする多量の遺物が出土した。このうち第26図以降第50図までに図示したものは磁器７点（19・35・38・46・58・70・79）、陶器４点（115・133・141・152）、土器１点（206）、石製品２点（236・237）である。また掘方埋土中から出土した遺物には磁器と陶器があり、磁器１点（41）と陶器２点（148･173）を図示した。さらに石垣裏込め土中からも磁器や石製品など若干の遺物（47・244）が出土している。掘方埋土出土の遺物をみると、17世紀代の備前系陶器から19世紀中頃の京・信楽系陶器や軟質施釉陶器まで幅広い年代の遺物が含まれており、構築年代を推定する手がかりとしては、もっとも新しい19世紀中頃の京・信楽系陶器が最有力候補となろう。また方形水溜遺構の内部からも17世紀代のものから19世紀後半までの年代幅をもつ各種の遺物が出土している。このうち使用年代の下限を推定する手がかりとなるのは瀬戸・美濃系磁器の皿（58）であり、年代は19世紀第３四半期に比定される。なお型紙摺の磁器類が含まれていないことからみると、1890年前後までに収まる可能性が高いとみるべきであろう。つまり本遺構は、幕末期に構築され明治10年代頃まで使用されたものだったと考えられる。

３）埋甕（便所）遺構（第24図、図版第９－３・４）

Ｇ－４グリッドで検出された埋甕であり、甕の内面上端部には、尿起源の石灰質の付着が、幅15㎝程度の帯状をなして遺存することから、本遺構は便槽であると判断された。検出面において径90㎝、深さ55㎝の不整円形の土坑を掘り込み、内部に大谷焼の水甕を埋置したものであるが、現状では甕の口縁部から胴部上半部を欠損している。なお石灰分の付着がもっとも厚みをもつところは底面から45㎝上方であり、この位置が尿溜めの汀線であったと考えた場合、貯水（尿）量は概算で820リットルである。本遺構がくみ取り式の便所であったと考えた場合、この顕著な石灰質の付着状況から推定される長期間の貯尿状態は、使用停止後の放置を意味するものと推定せざるをえない。

甕の内部や掘方埋土中からは若干の陶磁器類が出土した（23・29・53・66・140）。甕の内部から出土した磁器類には肥前系と瀬戸・美濃系のものがあり、肥前系の蓋には口縁内部に雷文、見込には環状



第 24 図　地域共同研究センター棟地点第１遺構面検出遺構実測図（縮尺：１／30）

松竹梅文が施されている。また瀬戸・美濃系の磁器には端反碗がある。いっぽう掘方埋土からは堺・明石系擂鉢が出土した。これらの組み合わせからみて、埋甕の廃棄年代は19世紀中頃（幕末期）に比定される。なお甕の口縁部をはじめ欠損した胴部上半部片は発見されなかった。

この埋甕の周囲に、柱穴など上屋に関係すると思われる遺構は認められなかった。ただしＨ－４・Ｈ－５グリッドからは長方形の浅い土坑が２基（土坑７・８）検出されており、ふたつが直交する関係にあっ

て布掘り状の建物基礎だった可能性も指摘できることや、埋甕とこれら２基の土坑以外には他の遺構が未検出で空白となっている点をみると、埋甕から土坑までの間が一連のものとして便所遺構となっていた可能性を考慮すべきかもしれない。とはいえ、この埋甕が屋外の野溜めであった可能性も捨てきれない。

４）溝１（第21図、図版第９－２）

A区で検出された唯一の遺構である。グリッドＢラインに沿って東西方向に直線的に延びる溝であり、検出面での平均的な幅60～70㎝、深さ20～30㎝である。溝の断面は逆台形を呈する。溝の内部を覆う埋土は黒色のシルトであり、陶磁器類や瓦が出土した。図示したものは陶器２点（137･169）である。出土遺物からみれば、遺構の年代は19世紀代に比定される。

５）溝２（第25図）

B区の方形水溜遺構の北側で検出された東西方向に延びる溝であり、幅30㎝前後、深さ20㎝をはかる。検出時点では西半部が見いだされ、比較的浅く収まるものと思われたが、第２遺構面の検出時にも東側へと延びることが判明した。その平面的な位置は、後に述べるＢ区東半部北側検出の土坑群のいくつかの中心をまたぐ形であるため、これら土坑群と密接な関係をもつ可能性が指摘できる。

６）溝３（第21・24図、図版第11－１・２）

B区の北端部で検出された。グリッドのＤラインに沿って東西に直線的に延びる溝である。溝の中心部分は調査区の外側にあるため、掘方の南端部しか検出できなかったところが大部分であり、Ｄ－６グリッドからＤ－７グリッドにかけて、かろうじて溝の南側半分が調査可能であった。Ｄ－６グリッドでの状況に即して概要を述べると、幅１ｍ以上、深さ25㎝をはかり、断面は逆台形を呈するものの、比較的浅い。溝の埋土はオリーブ黒色のシルトであり、上面には多量の瓦を主体とする遺物が廃棄され、溝を完全に覆う格好で敷き詰められたかのような状態であった。また対照的に、埋土の下半部からは遺物の出土はまばらであった。出土遺物には瓦をはじめ各種陶磁器類があるが、磁器23点（４・７・８・13・14・15・18・22・24・28・34・39・45・48・51・57・62・68・72・73・75～77)、陶器19点（88・98・101・102・105・110・111・123・138・147・149・153・157・159・174～178)、土器３点（186・187・199)、瓦７点（216・218～221・224・229）を図示した。これらの遺物の年代をみると、18世紀初頭のものから19世紀中頃のものまでを含んでおり、遺構の年代は19世紀中頃に比定される。

７）土坑４（第21図）

Ｇ－４グリッドで南半部を検出した土坑である。現状での長さ1.9ｍ、幅1.3ｍをはかり、全体は隅丸長方形を呈するものと推定される。出土遺物には若干の磁器類がある。

８）土坑５（第21・24図）

Ｈ・Ｉ－４グリッドで検出された。長さ1.9ｍ、幅95㎝、深さ34㎝で、断面はU字形を呈する。埋土は６層に細分可能であり、このうち２層と４層には多量の炭化物を含むほか、各層から土師質の皿類が出土した。こうした埋土の状況から、本遺構は廃棄用の土坑であったと判断される。出土遺物には土師質の灯明皿（188）を中心に備前焼の擂鉢（145)、焼締陶器皿や焙烙、土製品（213)、石製品（242）などがある。これら出土遺物からみて、本土坑の年代は17世紀末から18世紀前半に比定される。

9）土坑６（第21・24図、図版第９－５）

Ｇ－４・５グリッドで検出された。長さ1.4ｍ、幅90㎝の平面台形を呈する。深さは23㎝で、断面は浅いＵ字形となる。埋土は５層に細分可能であり、３層中には灰が混じる。

10）土坑14（第21・24図、図版第９－６）

Ｇ－５グリッドで検出された、径60㎝の円形を呈する土坑である。第１遺構面検出の土坑の中では掘方がもっとも明確なものであり、建物の柱穴の可能性をもつ。深さについては38㎝まで確認できたが、それ以下は湧水のために調査不可能であり、本来の床面はさらに深かった可能性がある。埋土は３層に細分可能であり、１層の状況は柱の抜き跡を想起させる。１層中からの出土遺物には陶磁器類があり、その年代は18世紀末に比定される。

11）土坑16（第21・24図、図版第９－７）

Ｇ－10グリッドで検出された土坑であり、長さ1.44ｍ、幅90㎝の隅丸長方形を呈する。深さは17㎝で断面は緩やかな台形状になる。埋土は６層に細分可能であり、２層には多量の木屑が含まれていた。出土遺物には陶磁器類があり、年代は19世紀中頃の幕末期に比定される。図示したものは陶器３点（164・179・181）、土器１点（201）、瓦１点（226）、鉄製品１点（234）、石製品１点（243）である。

12）土坑17（第21・24図）

Ｈ－10グリッドで検出された浅い土坑である。長軸1.45ｍ、短軸1.0ｍの不整な楕円形を呈しており、深さは25㎝をはかる。埋土は３層に細分可能であり、２層は粘土ブロックを斑状に含む。出土遺物には陶磁器類や鉄製品がある。これら陶磁器類の型式学的位置からみると、本土坑は18世紀後半代のものであると考えられる。鉄製品１点（233）を図示した。

13）土坑18（第20・21図、図版第９－８）

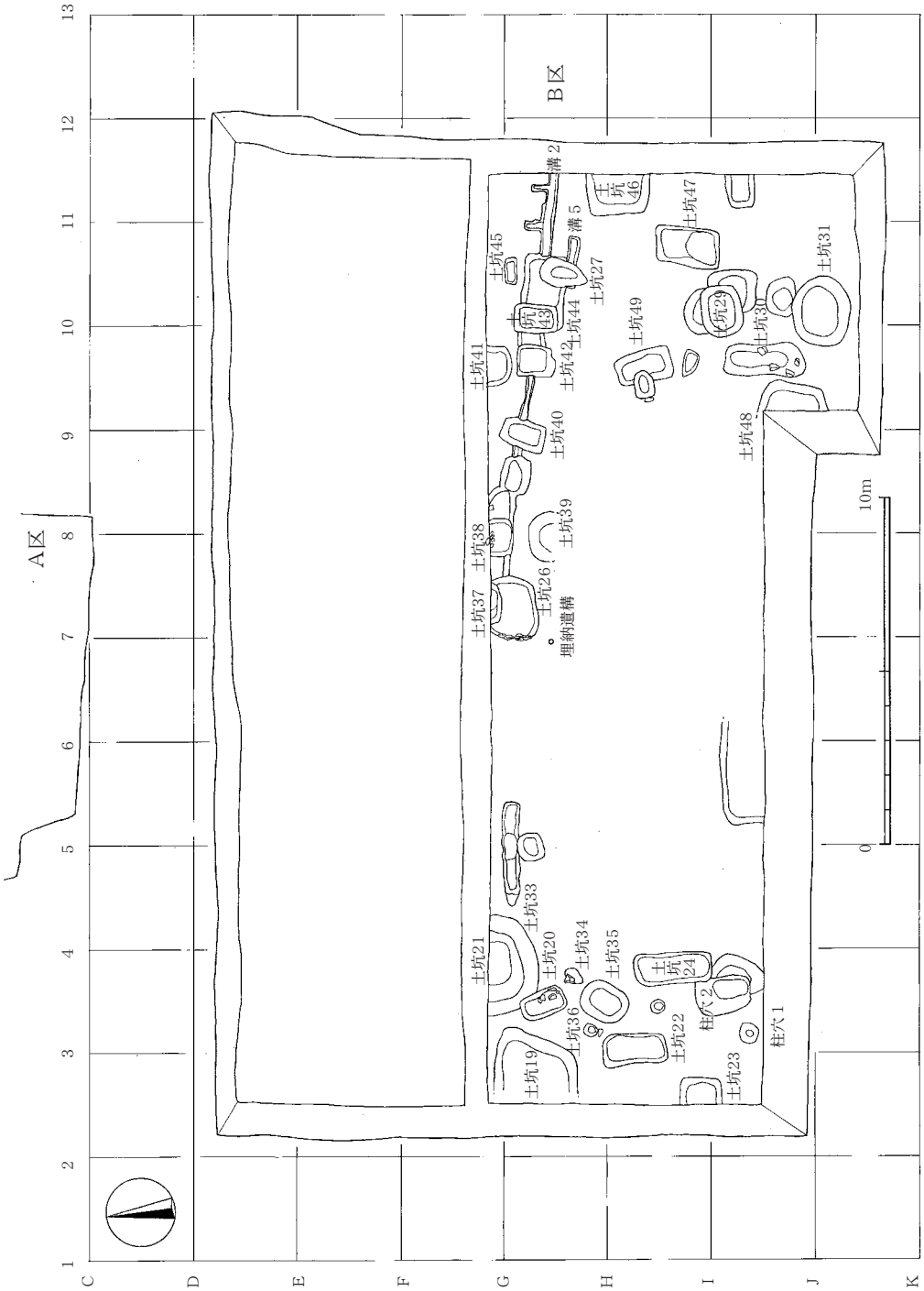
Ｆ－５グリッドで検出されたが、湧水対策のために東西方向の側溝を掘削している際に比較的まとまった数の遺物が出土したことをきっかけとして発見されたものであり、直後に壁面が崩落したため、平面的な広がりは把握できていない。側溝の南側には輪郭が延びておらず、土坑の本体はＢ区の北半にあったと推定される。Ｂ区（旧中庭部分）北側の壁面において観察を行ったところ、断面は方形となり、深さは35㎝程度であることが確認できた（第20図上段左端参照）。出土遺物には瀬戸・美濃系の端反碗と軟質施釉陶器類があり、特に後者は比較的良好な一括資料となるようである。年代は19世紀中頃～後半に比定される。このうち図示したものは磁器２点（30・55）、陶器７点（97・108・114・124・139・163・182）である。

３．第２遺構面（第25図、図版第８－７）

第２遺構面から検出された遺構については、前章で述べたように調査時に受けた制約によって詳細な調査を行えなかった。要するに輪郭の検出直後に地下水の湧水によって全体が水没する状況であったため、土層観察や個別遺構の写真撮影は不可能であり、掘り込み内部の土砂を手探りで除去し、遺物を取り上げるのが精一杯であった。こうした状況であったため、個別遺構の観察はごく概略にとどめざるをえない。なお検出された遺構の配置をみると、およそ３グループに分けることができる。これらグループごとに概要を報告する。

１）Ｂ区西端付近検出の遺構（第25図、図版第11－３・４）

調査区の西端付近からは土坑10基と柱穴２基が確認された（土坑19・20・21・22・23・24・33・34・35・36、柱穴１・２）。土坑の平面形態には、土坑19・21・23・33・35のような不整形なものと、土坑20や22・24のような長方形を呈するものとがある。このうち土坑20の埋土内には拳大の角礫や遺物が多量に含まれており、塵の廃棄土坑であろうと思わせる状態であった（図版第11－３参照）。しかし他の土坑について、性格づけを行いうるものはなかった。たとえば土坑22の埋土は固く締まって



第25図　地域共同研究センター棟地点第２遺構面検出遺構配置図（縮尺：１／200）

おり、土坑24の埋土は砂と炭化物が互層状をなしていた。このほか、柱穴と判断した落ち込みは２基あるが、埋土の状況は確認できず、性格を断定するには至らなかった。

各土坑からの出土遺物は概して少なかったが、土坑22からは陶磁器類が比較的まとまって出土した。土坑22出土遺物のうち、図示したのは磁器５点（１・２・９・31・80)、陶器３点（91・94・117）である。このほか土坑19出土土器（197)、土坑20出土陶器（99)、土坑23出土磁器（10)、土坑24出土土器（198)、土坑33出土磁器（67)、土坑36出土磁器（63）を図示した。

２）Ｂ区東半部北側検出の遺構（第25図、図版第11－６・７）

第１遺構面の方形水溜遺構の北側にあたるこの地区では、土坑11基と溝１条が検出された（土坑26・27・37・38・39・40・41・42・43・44・45、溝５)。ここでは東西に延びる溝２に重なる形で土坑26から土坑44までが検出されたほか、井戸の掘方に切られた形の土坑39や、調査区の北端部付近で土坑41や土坑45が検出された。このうち溝２と重なる状態で一列に並ぶ土坑群については、相互に組み合って何らかの構造物の基礎構造をなしていた可能性を想起させるものであった。第２章で述べた工学部実習棟地点の調査時にも、ごく類似した状況を示す土坑群が見つかっているので、おそらく類型化の可能な遺構ではあろう（第９図参照)。しかし溝２を布掘り状の建物基礎構造だと考えた場合、それと重なる土坑群を単純に柱穴だとは考えられないことになり、建て替えの結果などという解釈も容易ではない。確たる成案を見いだしえなかった。

なおこれら一連の土坑の最西端部にある土坑26では、その掘方の西辺に沿って結晶片岩の板石３枚が南北に直線的に並べられた状態の石列を配する（図版第11－６参照)。この石列がどのような意図をもつのかについては不明であるが、この石列の南端部からさらに南側に１ｍほど延長線上をたどった場所からは次に述べる特殊な埋納遺構が発見されたので、両者に関連性があるのではないかと推測させるものであった。

各土坑からはそれぞれ若干の遺物が出土しており、土坑26出土磁器（42)、土坑27出土磁器（12）土坑38出土磁器（59）および瓦（228)、土坑39出土磁器（56）および陶器（86)、土坑40出土磁器（33）および陶器（93)、土坑42出土磁器（52)、土坑43出土磁器（５･16)、土坑44出土陶器（167）を図示した。

３）埋納遺構（第25図）

Ｇ－６グリッド東端からは、径20㎝前後の不整円形を呈する極小規模な土坑内に完形の陶器の火入れを埋納し、火入れ内部には偏球形を呈する青銅製品を納めたうえ、この青銅製品と火入れを砂で埋めた状態の埋納遺構が発見された。この埋納遺構は、地鎮祭の遺構として一般的に認知されているものとは異なるものの、呪的な性格を帯びたものであったと考えられる。埋納に用いられた火入れと青銅製品は第51図下段に示したとおりである。仮に土坑26を西側の端部とする建造物がこれら溝や土坑群の上に建っていた可能性を考えるのであれば、本埋納遺構は建物の縁に沿う場所を選んだのだと考えることも可能である。

４）Ｂ区東側検出の遺構（第25図、図版第11－５）

方形水溜遺構の東側では土坑７基を確認した（土坑29・30・31・46・47・48・49)。不整形な落ち込みが複雑な切り合い関係をもつかのような状況のなかに、南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する土

坑30と土坑47の２基と、不整円形を呈する土坑29と土坑31の２基とを確認できたほか、隅丸方形を呈する土坑46と土坑48、隅丸長方形を呈する土坑49を検出した。このうち土坑30の埋土中には拳大の角礫が４個体含まれていることが確認できた。各土坑埋土中からは陶磁器類や土器類を中心に各種の遺物が出土した。このうち土坑29出土陶器（85･87）および金属製品（232）、土坑30出土磁器（74）・同陶器（96・121・135・150）および土器（191・200）、土坑31出土磁器（37・60・64）・同陶器（81・82・92）・同土器（192・193）および土製品（212）を図示した。

第３節　出土遺物

出土遺物には磁器、陶器、土器、土製品、瓦、金属製品、石製品がある（第26～51図、図版第12～29）。なかでも陶磁器類は膨大な数があるが、ここでは材質ごとに代表的なものを報告する。

１．磁　　器

１）肥前系碗類（第26・27図14～21、図版第12・13）

第26図１・２は染付碗である。１は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。畳付端内側に砂が付着する。高台内に染付による崩れた「太明年製」銘を描く。外面全体に細かい気泡が見られる。２は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理はやや不揃いである。畳付に砂が付着する。口縁部はややゆがむ。

３～７はくらわんか手の染付碗である。３は波佐見窯（長崎県波佐見町）のものである。胎土は灰白色を呈し、畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。高台内に染付による崩れた「大明年製」銘を描く。４は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いであり、釉際露胎部は橙色を呈する。畳付端内側に砂が付着する。見込にコンニャク印判による五弁花文を施す。５は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、畳付全面に砂が付着する。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。６は焼成不良で、胎土は灰黄色、呉須は灰オリーブ色を呈する。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付にわずかに砂が付着する。７は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。畳付端内側に砂が付着する。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。内面には降灰が見られる。

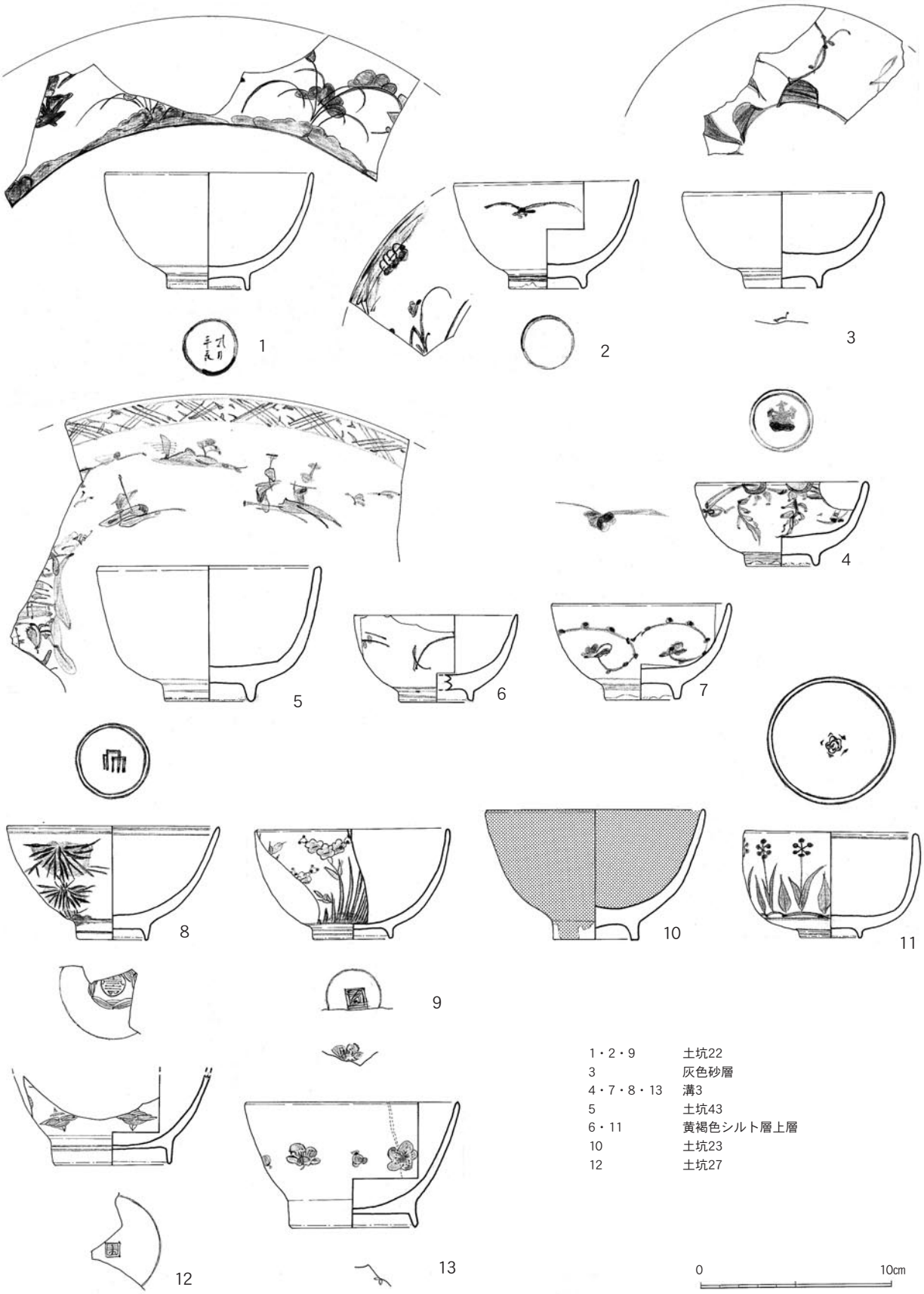
８は染付小広東碗である。胎土は灰白色を呈し、畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。見込に染付による源氏香文を描く。

９は染付碗である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、精良である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。高台内に染付による二重方形枠内「渦福」銘を描く。

10は青磁碗である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、体部には内外面ともに明緑灰色の青磁釉を施す。高台外面には体部の釉薬が流れ掛かるが、畳付と高台内は無釉である。畳付の幅が一定ではない。

11は染付小丸碗である。胎土はやや白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。見込に染付による五弁花文を描く。呉須の発色は悪い。同じ層から同一規格品がもう１個体出土している。

12・13は染付広東碗である。12は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。見込には丸に「壽」字と雲繋ぎ文、高台内には二重方形枠内変形字銘を描く。体部外面には雲散らし文と丸に「壽」字が描かれていると思われる。13は白色の強い灰白色を呈する精良な胎



第 26 図　地域共同研究センター棟地点出土磁器(1)（縮尺：１／３）

土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。体部は焼継されており、高台内には焼継の際に入れられた印が見られる。

第27図 14・15は端反碗である。14は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。蛇ノ目高台をもち、畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。内外面に色絵による竹文を描くが、上絵具は黒色または褐色に変色し、青色の痕跡がわずかに残るのみである。15は白色の強い灰白色を呈し、精良で硬質な胎土である。体部外面には染付による亀文と文字、見込には染付による亀文を描く。呉須の発色は良好である。

16～20は染付碗である。16は筒形碗である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付に砂が付着する。見込には染付による五弁花文と無数の擦痕が見られる。17は高台が「八」の字状に開き腰が張る碗である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理はやや不揃いである。全面に大きく貫入が入る。拡張部のＡトレンチから同一規格品がもう１個体出土している。18は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。高台内には染付による「成化年製」銘と、焼継の際に入れられた印が見られる。19はやや白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側に砂が付着する。見込に染付による「大明成化年製」銘を描く。全面に細かい気泡が見られる。20はやや白色の強い灰白色を呈し、黒色砂粒を含む粗い胎土である。型紙摺による雨降り文を施し、染付による文様も見られる。口縁端部に口紅を施す。全面に貫入が入る。

21は青磁染付碗である。腰部に段をもち、体部が直線的に開く、いわゆる朝顔形碗である。胎土は灰白色を呈し、やや粗い。外面に明オリーブ灰色の青磁釉を施し、内面と高台内には透明釉を施す。畳付は無釉で、高台内面の釉際処理はやや不揃いである。見込にコンニャク印判による五弁花文を施し、高台内に染付による二重方形枠内「渦福」銘を描く。

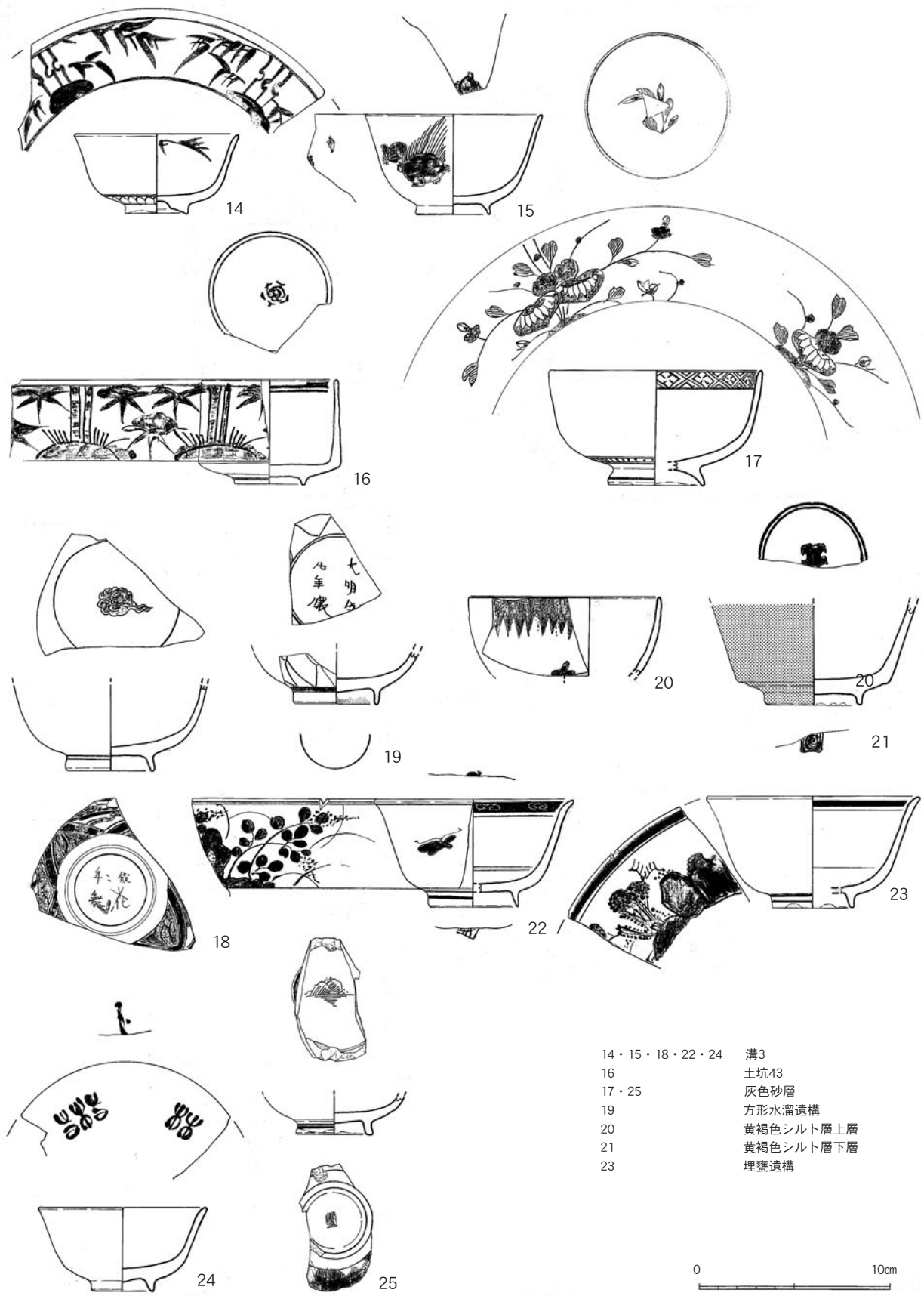
２）瀬戸・美濃系碗類、関西系碗類（第27図22～25、図版第13）

第27図 22～24は瀬戸・美濃系の染付端反碗である。22は白色の強い灰白色を呈する精良な胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。口縁部内面に墨弾きによる如意頭文を描き、見込にも染付による文様が見られる。高台内には染付による一重方形枠内変形字銘を描く。23は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理はやや不揃いである。体部に焼継の痕跡が見られる。24は白色の強い灰白色の胎土である。体部外面に染付による篆書文を描き、見込にも染付による文様を描く。口縁端部に口紅の痕跡が見られる。

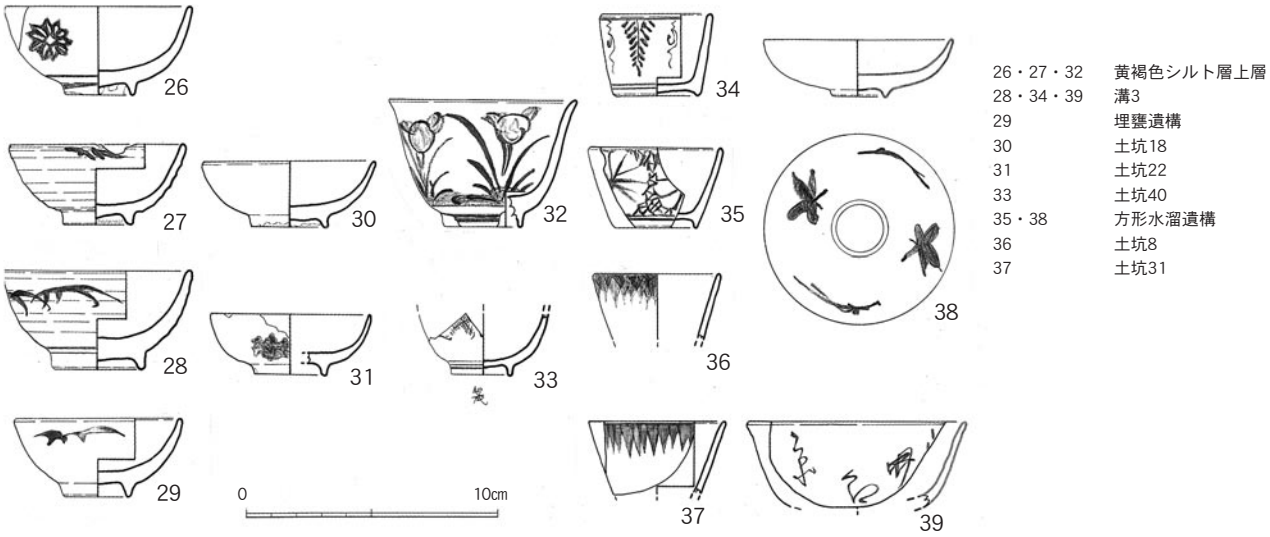
25は関西系の染付碗である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、ややガラス質である。畳付は無釉で、高台外面の釉際処理はやや不揃いである。釉際の露胎部は橙色を呈する。高台内に染付による一重方形枠内変形字銘を描き、呉須の発色は良好である。

３）小坏類（第28図、図版第14）

第28図 26～38は肥前系の染付小坏である。26は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、高台内面の施釉は粗く、釉際の処理は不揃いである。釉際の露胎部は橙色を呈する。畳付の幅は一定ではなく、畳付端内側にわずかに砂が付着する。コンニャク印判による菊花文を施す。27は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側に砂が付着する。口縁部外面に染付による笹文を描く。体部外面はロクロ目が顕著である。28は灰色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は



第 27 図　地域共同研究センター棟地点出土磁器(2)（縮尺：１／３）



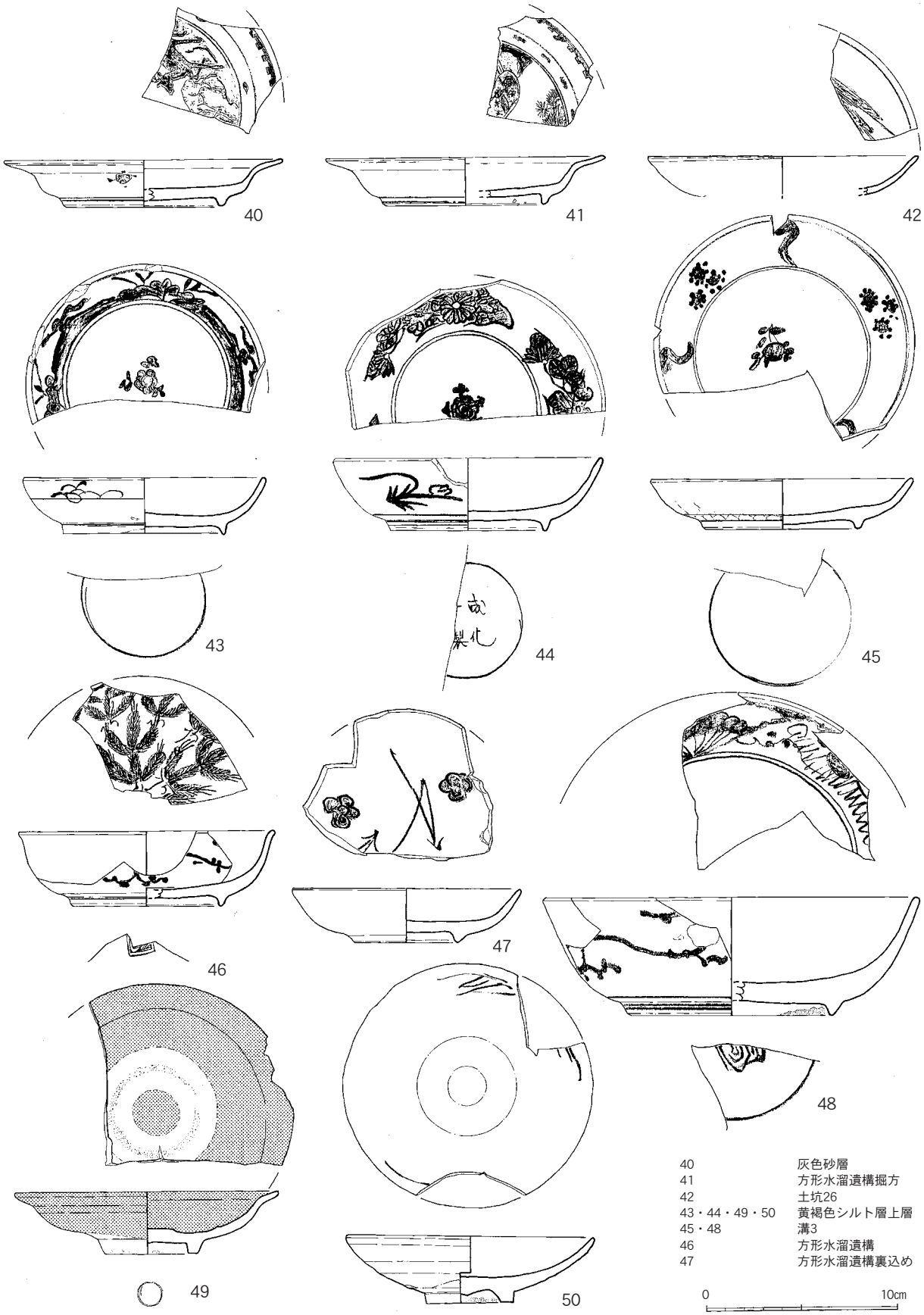
第28図　地域共同研究センター棟地点出土磁器(3)（縮尺：１／３）

揃う。畳付端内側に砂が付着する。呉須の発色は悪く、青灰色・暗青灰色を呈する。いわゆる「くらわんか手」である。体部外面はロクロ目が顕著である。29は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は悪い。完形である。30はやや黄味を帯びた灰白色を呈する陶器質の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。釉薬には透明感がなく、やや黄味を帯びる。ほぼ完形である。31は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側に砂が付着する。コンニャク印判による桐文を３方向に施すと思われる。全面に細かい気泡を多く含み、内面には降灰が見られる。32は焼成不良で、胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、黒色砂粒を含み粗く、陶器質である。透明釉は黄味を帯び、濁る。内面に貫入が入る。33は白色の強い灰白色を呈し、精良な胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。高台内に染付による「製」字銘を描く。口縁部は端反になると思われる。34～37は碁笥底の小坏である。34は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。35は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付に砂が付着する。施釉は粗く、内面と高台内の一部は露胎となる。36･37は口縁部のみの破片であるが、底部は碁笥底になると思われる。36は黄味を帯びた灰白色を呈する粗い胎土である。型紙摺による雨降り文を施す。全面に細かい貫入が入る。37は白色の強い灰白色を呈し、黒色砂粒を含む胎土である。染付による雨降り文を施す。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。38は灰白色を呈し、ややガラス質で光沢のある胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は良好で、鮮やかな藍色を呈し、ダミのみで紅葉文と折松葉文を描く。口径に比べて高台径が非常に小さい器形で、いわゆる紅皿である。

39は関西系の小坏である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、ガラス質で光沢がある。体部外面には、実測図の向かって右より「□（小？）町紅京」と色絵により描かれている。上絵具は黒色または褐色に変色している。いわゆる紅猪口である。

４）皿類（第29・30図51～58、図版第15・16）

第29図40～42は景徳鎮窯系の青花皿である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、硬質で精良である。呉須の発色は良好である。40･41の畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付と高台端内外面に粗い砂粒が付着する。高台内はカンナ削りである。41・42の口縁端部には虫喰が見られる。

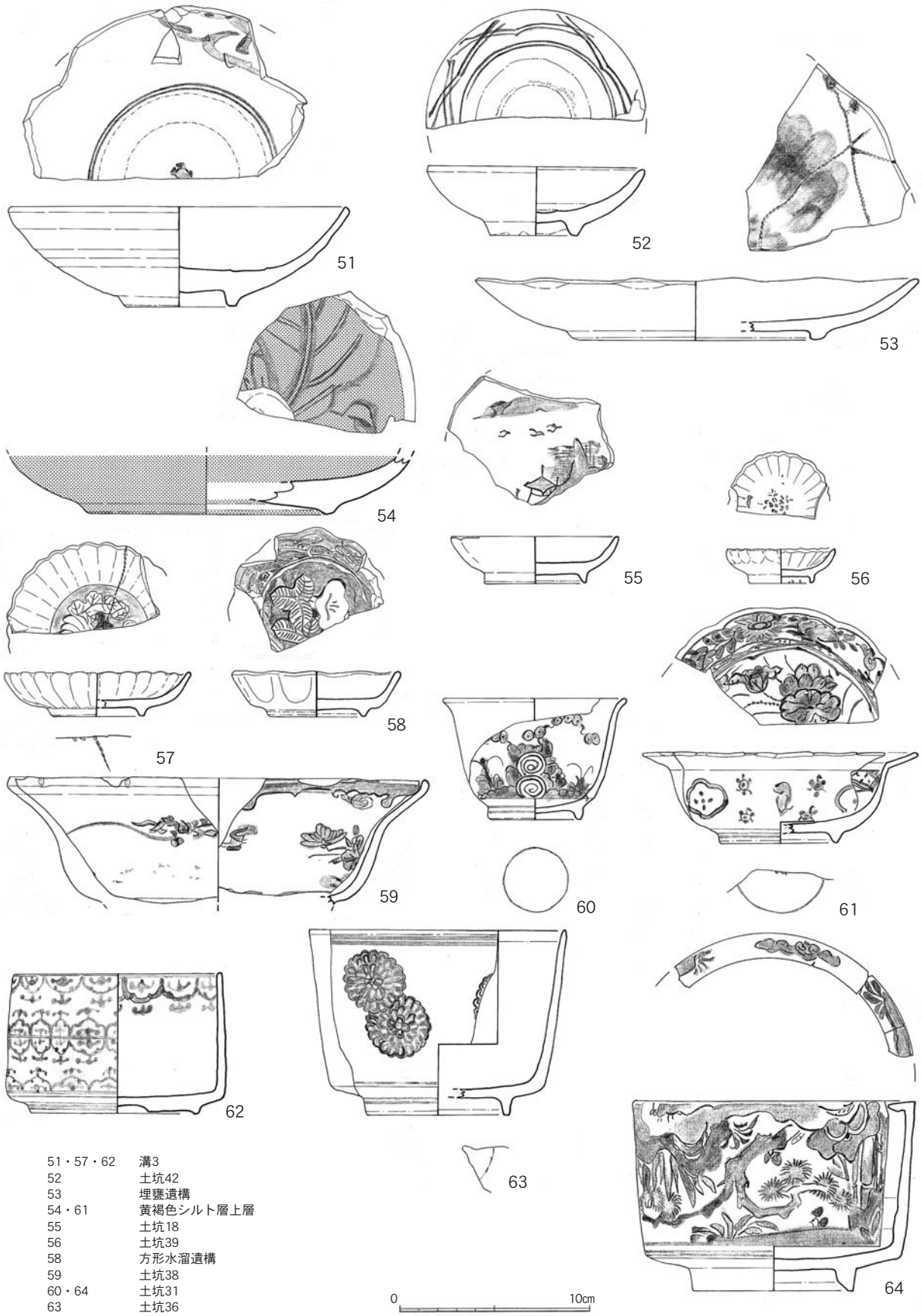


第29図　地域共同研究センター棟地点出土磁器(4)（縮尺：１／３）

43 ～ 48 は肥前系の染付皿である。43 は焼成不良で、胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、呉須は青灰色を呈する。透明釉は黄味を帯び、濁る。外面の施釉は粗く、むらがあり、全面に大きく貫入が入る。畳付は無釉である。44 は焼成不良で、胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、陶器質である。呉須は青灰色を呈し、透明釉は黄味を帯び、濁る。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。内面にはコンニャク印判による菊文と五弁花文を施し、高台内には染付による「成化年製」銘を描く。体部外面に釉薬と呉須が焼け飛んだような痕跡があり、二次焼成を受けた可能性がある。45は白色の強い灰白色の胎土である。透明釉は明緑灰色を呈し、外面の施釉は粗く、むらがある。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付端内側にわずかに砂が付着する。体部外面下部に凹凸が見られ、型打成形の可能性もある。全面に細かい気泡が見られる。46 は焼成不良で、胎土は灰白色を呈し、陶器質である。透明釉は黄味を帯び、やや濁る。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は良好で、高台内に染付による二重方形枠内「渦福」と思われる銘を描く。全面に貫入が入る。47は灰白色の胎土である。外面の施釉は粗く、むらがある。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。48 は灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。畳付に砂が付着する。高台内に染付による一重方形枠内変形字銘を描く。内面には大きな貫入が入る。いわゆる「くらわんか手」である。49 は肥前系の青磁皿である。胎土は灰白色を呈し、緻密である。体部外面下部から高台内を除き明緑灰色の青磁釉を施す。見込は蛇ノ目状に釉剥ぎし、その部分にアルミナ砂を塗布する。高台内には円刻を施し、畳付には砂が付着する。50 は肥前系の染付皿である。胎土は灰白色である。外面の施釉は粗く、むらがある。体部外面下部から高台内は無釉で、見込は蛇ノ目状に釉剥ぎし、露胎部はにぶい橙色を呈する。高台内は粗く削り出され、畳付と高台端内面に砂が付着する。体部外面はロクロ目が顕著である。

第 30 図 51 ～ 53 は肥前系の染付皿である。51 は灰色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、見込は蛇ノ目状に釉剥ぎする。呉須の発色は悪く、緑灰色を呈する。見込に五弁花文を施すが、コンニャク印判か手描きかは不明瞭である。体部外面上半部はロクロ目が顕著である。52 はやや灰色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。見込は蛇ノ目状に釉剥ぎし、その部分に重ね焼きの痕跡が見られる。呉須の発色は悪く、青灰色を呈する。いわゆる「くらわんか手」である。53 の口縁部は型打成形の輪花となる。胎土は灰白色である。内面は白化粧土を施したのち透明釉を掛け、畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は良好で、透明感のある藍色を呈する。全面に大きく貫入が入る。焼継されている。志田窯（佐賀県塩田町）のものの可能性もある。54 は肥前系の青磁皿である。胎土は灰色の強い灰白色である。全面に明緑灰色の青磁釉を施し、高台内を蛇ノ目状に釉剥ぎし、その部分に鉄漿を塗っている。釉剥ぎ部分には窯道具の痕跡が見られる。内面にはヘラ彫による文様を施す。55・56 は肥前系の染付皿である。55 の口縁部は型打成形の輪花となり、口縁端部には口紅を施す。焼成不良で、胎土は灰色の強い灰白色を呈するが、やや色にむらがあり、陶器質である。釉薬と呉須には透明感がない。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。56 は型打成形の菊花形小皿で、いわゆる手塩皿である。胎土は白色の強い灰白色で、釉薬には透明感がなく、白濁する。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。高台は貼付けで、粗い砂粒が付着する。見込に型紙摺による五弁花文を施す。

57・58 は瀬戸・美濃系の皿である。57 は型打成形の菊花形皿で、58 は型打成形の輪花となる。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。57 は見込に、58 は見込と内側面に型押



51・57・62	溝3
52	土坑42
53	埋甕遺構
54・61	黄褐色シルト層上層
55	土坑18
56	土坑39
58	方形水溜遺構
59	土坑38
60・64	土坑31
63	土坑36

第30図　地域共同研究センター棟地点出土磁器(5)（縮尺：１／３）

による文様を施し、その周辺をダミで塗る。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。57 は焼継されており、高台内には焼継の際に入れられた印が見られる。

５）鉢類（第 30 図 59 ～ 64、図版第 16）

第 30 図 59 ～ 62 は肥前系の染付鉢である。59 の口縁部は型打成形の輪花となり、口縁端部には口紅を施す。胎土はやや白色の強い灰白色である。外面に細かい貫入が入る。60 は白色の強い灰白色の胎土である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。61 の口縁部は型打成形の輪花となる。胎土は白色の強い灰白色を呈し、緻密である。高台内には染付による一重圏線内に文様を施す。全面に細かい気泡が見られる。62 は灰白色を呈する緻密な胎土である。蛇ノ目凹形高台で、高台内の幅広の部分は無釉で降灰が見られる。口縁端部にも染付を施す。

63 は肥前系の染付蓋物である。胎土は灰白色を呈し、緻密である。口縁部内外面と畳付は無釉で、釉際の露胎部は橙色を呈する。コンニャク印判による菊花重ね文を施す。外面に細かい気泡が見られる。

64 は肥前系の染付香炉である。胎土はやや白色の強い灰白色を呈し、黒色砂粒を含む。畳付と内面は無釉である。内面には降灰が見られ、外面には大きく貫入が入る。

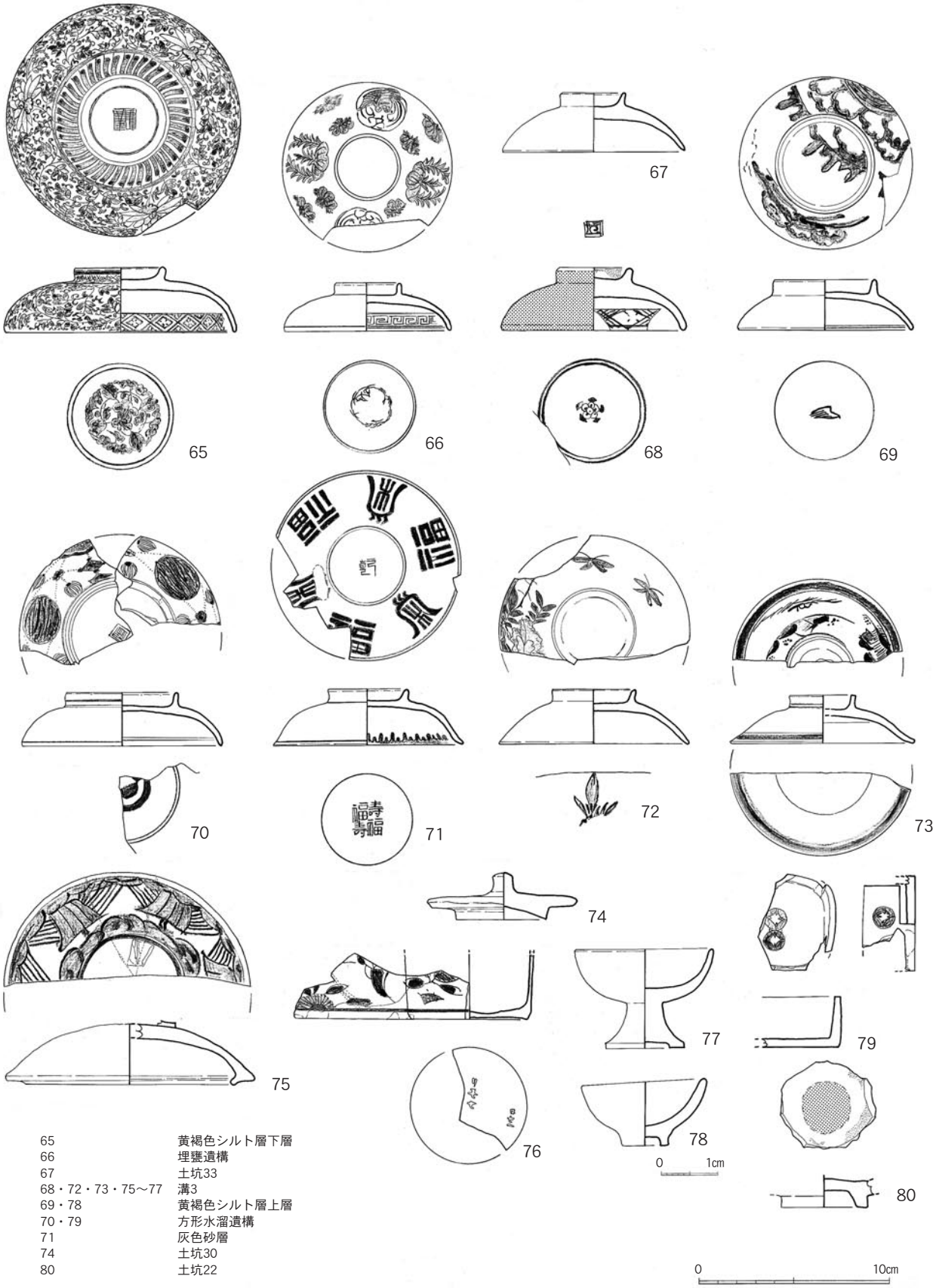
６）蓋類（第 31 図 65 ～ 75、図版第 17）

第 31 図 65 ～ 72 は肥前系の碗蓋である。65 は白色の強い灰白色を呈する緻密な胎土である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。つまみ内に染付による一重方形枠内変形字銘を描く。ほぼ完形である。66 は白色の強い灰白色を呈する緻密な胎土である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。見込に染付による環状松竹梅文を描く。67 は白磁碗の蓋である。胎土は白色の強い灰白色である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。外面には細かい貫入が入り、内面にも見込を除き大きく貫入が入る。68 は青磁染付の碗蓋である。胎土はやや灰色の強い灰白色を呈し、粗い。外面には灰オリーブ色の青磁釉を施し、内面とつまみ内には透明釉を施す。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。つまみの内側に砂が付着する。見込に染付による五弁花文、つまみ内に染付による二重方形枠内「渦福」銘を描く。呉須の発色は悪い。いわゆる「くらわんか手」である。69・70 は染付広東碗の蓋である。69 は白色の強い灰白色の胎土である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は良好で、見込に染付による岩波文を描く。ほぼ完形である。70 は灰白色を呈する緻密な胎土である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は良好で、見込に染付による丸文、つまみ内に染付による二重方形枠内変形字銘を描く。71･72 は染付端反碗の蓋である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、緻密である。つまみ端部は無釉で、釉際の処理は揃う。呉須の発色は良好である。71 はつまみ内に、清の年号「乾隆」の「乾」の字の篆書体を染付により描く。

73 は瀬戸・美濃系の染付端反碗の蓋である。胎土は白色の強い灰白色である。畳付は無釉で、釉際の処理は揃う。外面に染付による山水文を描く。

74 は肥前系の白磁水注の蓋である。浅黄橙色の胎土で、蓋の下面は無釉である。完形である。

75 は肥前系の染付段重または蓋物の蓋である。胎土はやや白色の強い灰白色を呈し、緻密である。身の口縁部を受ける部分とかえりは無釉で、砂が付着する。つまみはそのほとんどを欠くが、橋つまみが貼り付けられていたと思われる。焼継されている。



65	黄褐色シルト層下層
66	埋甕遺構
67	土坑33
68・72・73・75～77	溝3
69・78	黄褐色シルト層上層
70・79	方形水溜遺構
71	灰色砂層
74	土坑30
80	土坑22

第31図　地域共同研究センター棟地点出土磁器(6)（縮尺：１／３、78は１／１）

７）その他（第 31 図 76 ～ 80、図版第 17）

第 31 図 76 は関西系の染付燗徳利の底部である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、ややガラス質で光沢がある。内面と底部外面は無釉である。底部際外面は面取りする。焼継されており、底部外面には焼継の際に入れられた印が見られる。**77** は肥前系の仏飯器である。胎土は灰白色である。底部の中央部を浅く削り取り、周辺部を幅広の輪高台状に残す。底部外面は無釉である。体部を約 1/2 欠くため文様の有無は不明である。**78** は産地不明のミニチュア白磁碗である。胎土は白色の強い灰白色である。完形である。**79** は平面形が隅丸方形を呈する肥前系の染付鬢水入れまたは鉢である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、緻密である。外面と底部内面に染付による七宝繋ぎ文を描く。底部外面は無釉である。**80** は加工円盤である。見込を蛇ノ目状に釉剥ぎした肥前系の青磁皿の体部を打ち欠いたものと思われる。胎土は灰白色である。高台は無釉で、畳付から高台内にかけて砂が付着する。見込の釉剥ぎ部分にはアルミナ砂が塗布されている。

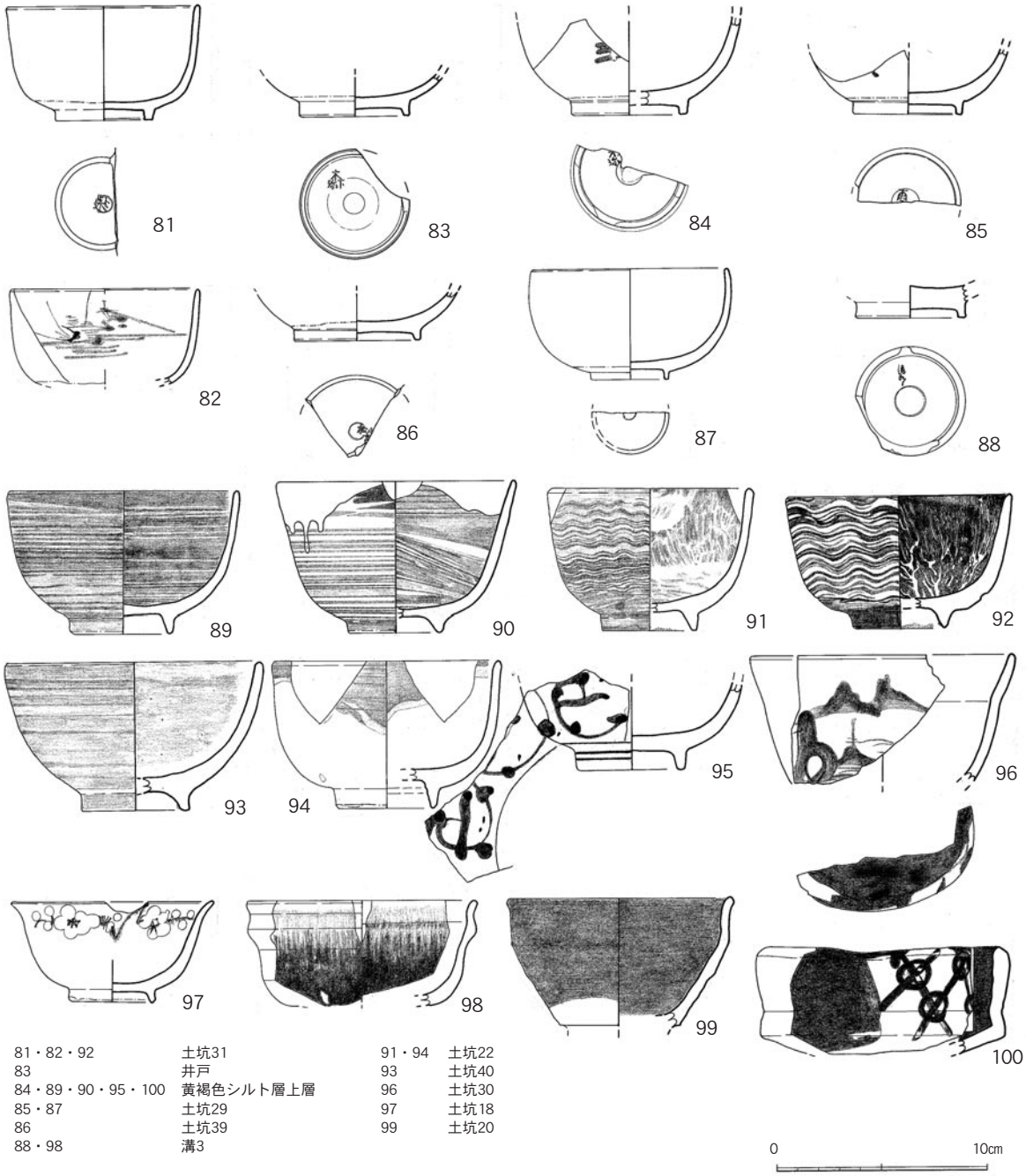
2. 陶　　器

１）肥前系碗類（第 32 図 81 ～ 96、図版第 18）

第 32 図 81 ～ 87 は京焼風陶器の碗である。**81・82** はともに土坑 31 からの出土であり、口径・器形・胎土・釉調の一致から同一個体と思われる。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、緻密でやや硬質である。**81** は体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、高台と高台内には白化粧土を施す。畳付端内側がわずかに突出する。高台内に円刻と「柴」の刻印を施す。高台外面には降灰が見られる。**82** は呉須による山水文を施す。**81・82** ともに全面に細かい貫入が入る。**83** は黄味を帯びた灰白色を呈する緻密な胎土である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、高台と高台内には白化粧土を施す。高台端外側は面取りする。高台内に円刻と「木下弥」の刻印を施す。全面に細かい貫入が入る。**84** は黄味を帯びた灰白色を呈するやや粗い胎土である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、高台と高台内には白化粧土を施す。高台端外側はわずかに面取りする。体部外面には呉須による文様が見られ、高台内には円刻と「木下弥」の刻印を施す。全面に細かい貫入が入る。**85** はやや灰色の強い灰白色を呈する硬質な胎土である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、釉際の露胎部は橙色を呈する。畳付端内側がわずかに突出する。体部外面には呉須による文様が見られ、高台内には円刻と「雲」の刻印を施す。全面に細かい貫入が入る。**86** は灰黄色を呈する硬質な胎土である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、釉際の露胎部は橙色を呈する。高台端外側はわずかに面取りする。高台内に円刻と「小松吉」の刻印を施す。全面に細かい貫入が入る。**87** は黄味を帯びた灰白色を呈する緻密な胎土である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、無釉部分には白化粧土を施す。体部の大部分を欠損するため文様の有無は不明である。高台内には円刻を施す。全面に細かい貫入が入る。

88 は京焼風陶器碗の体部を打ち欠いた加工円盤である。加工途中のものなのか、割れ口は粗いままである。胎土は黄味を帯びた灰白色である。高台と高台内は無釉で、高台端外側はわずかに面取りする。高台内に円刻と「清水」の刻印を施す。

89 ～ 94 は刷毛目碗である。白化粧土による刷毛目を施したのち透明釉を掛けている。**89** は浅黄橙色を呈する粗い胎土である。畳付は無釉である。**90** は灰黄褐色を呈する胎土である。刷毛目を施したの



第32図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(1)（縮尺：１／３）

ち、口縁部内外面に白化粧土を流し掛けている。畳付は無釉である。91は灰赤色を呈する硬質な胎土である。畳付は無釉で、畳付全面に砂が付着する。92は褐灰色を呈する硬質な胎土である。畳付は無釉で、高台端内面に砂が付着する。体部外面下部にヘラ状工具で沈線のような文様を施す。93はにぶい黄橙色を呈する粗い胎土である。外面の刷毛目は非常に薄く施され、内面に刷毛目は見られない。畳付は無釉で、畳付端内側にわずかに砂が付着する。高台内は兜巾となる。94は黄灰色を呈する硬質な胎土である。口縁部内外面に刷毛目を施したのち、白化粧土を流し掛けている。高台内面に浅い沈線のようなものが見られる。

95･96 は陶胎染付碗である。95 は黄灰色を呈する粗い胎土である。畳付は無釉で、砂が付着する。全面に大きく貫入が入る。96 はやや灰色の強い黄灰色を呈する硬質な胎土である。体部上部は外反する。全面に大きく貫入が入る。

２）瀬戸・美濃系碗類（第 32 図 97 ～ 100、図版第 18）

第 32 図 97 は浅黄橙色を呈するやや緻密な胎土の碗である。畳付は無釉で、釉際の処理は不揃いである。体部外面に白化粧土と鉄絵による折枝梅文を描いたのち灰釉を施す。内面は白化粧土を施したのち透明釉を掛ける。全面に細かい貫入が入る。98 は黄味を帯びた灰白色を呈する粗く硬質な胎土である。内外面ともに鉄釉を施したのち、体部上半に藁灰釉を漬け掛けした、いわゆる景次茶碗である。99 は天目茶碗である。体部の屈曲部より下は直線的に開き、屈曲部より上は口縁部に向かって直立し、口縁部はわずかに外反する。胎土は黄味を帯びた灰白色である。体部外面下部を除き鉄釉を施す。100 は黒織部の沓茶碗である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。内面には鉄釉を施し、外面には鉄絵を描いたのち透明釉を施す。体部外面下部の鉄絵が描かれていない部分は無釉である。

３）京・信楽系碗類（第 33 図 101 ～ 112、図版第 19）

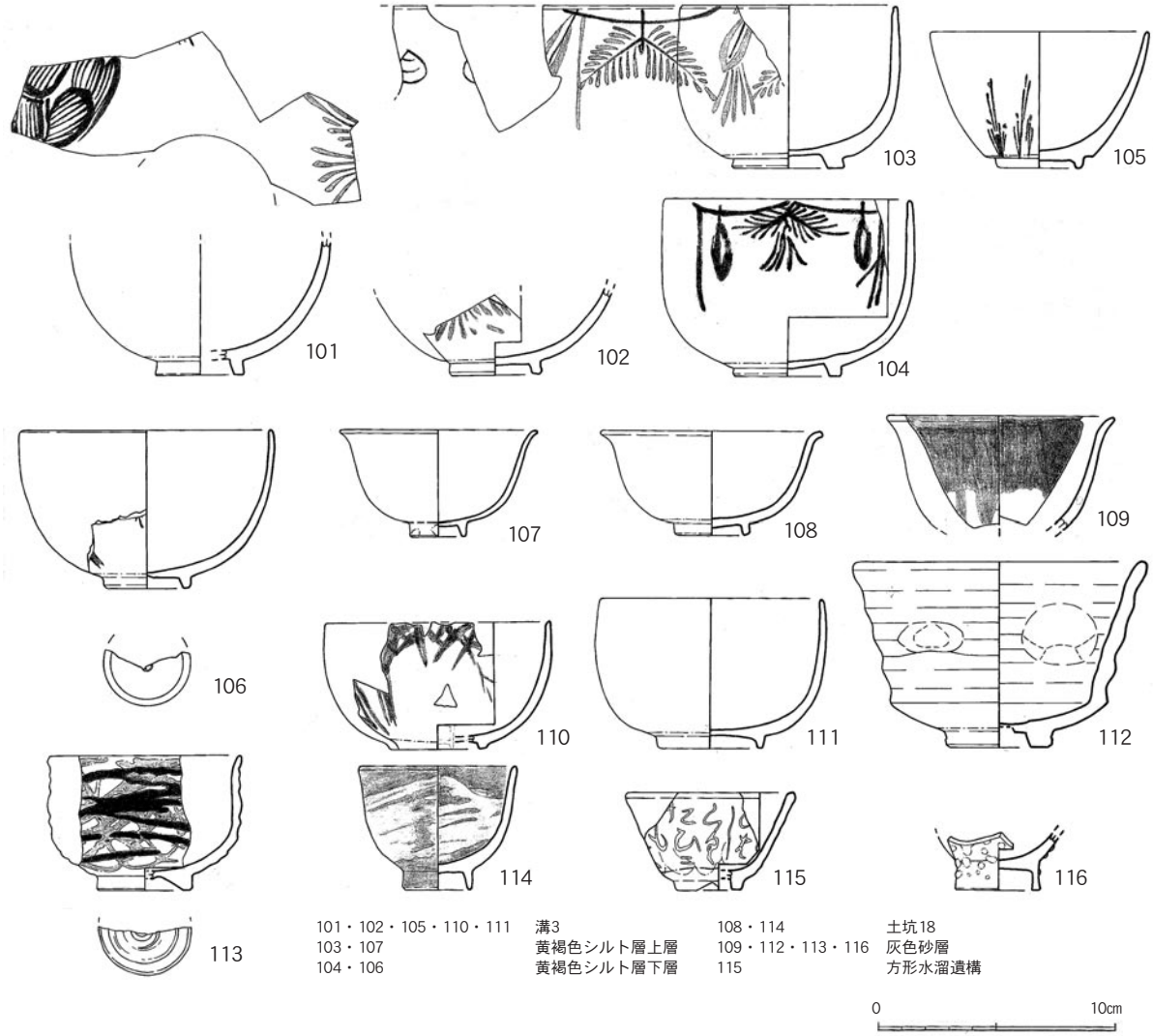
第 33 図 101 ～ 104 はしめなわ文茶碗である。101 ～ 103 は色絵で、104 は鉄絵である。101 は灰白色を呈する磁器質の胎土である。色絵によるしめなわ文と海老文を描き、体部外面下部から高台内を除き灰釉を施す。しめなわのウラジロ葉は緑色で、ウラジロ葉柄と海老は赤色で上絵付している。高台端外側はわずかに面取りする。全面に細かい貫入が入る。102 は灰白色を呈する磁器質の胎土である。しめなわのウラジロ葉は緑色で、ウラジロ葉柄は赤色で上絵付している。高台端外側は面取りする。全面に細かい貫入が入る。103 は黄灰色を呈する硬質な胎土である。色絵によるしめなわ文と宝珠文を描く。しめなわの横縄、ウラジロの中軸・葉柄・休止芽、ユズリハの柄および宝珠は赤色で上絵付し、そのほかは色絵の痕跡のみで色彩は失われている。幅広の高台で、高台端外側は面取りする。全面に貫入が入る。104 は灰色の強い灰白色を呈する硬質な胎土である。鉄絵によるしめなわ文を描く。幅広の高台で、高台端外側はわずかに面取りする。全面に貫入が入る。

105 は小杉茶碗である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、磁器質である。体部外面下部から高台内は無釉で、高台端外側は面取りする。呉須と鉄絵による若松文を描く。全面に細かい貫入が入る。

106 は黄味を帯びた灰白色の胎土の碗である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施す。体部外面の文様部分を大部分欠損するが、鉄絵がわずかに見られる。高台端外側は面取りし、高台内には円刻を施す。全面に細かい貫入が入る。

107 ～ 109 は端反碗である。胎土は白色の強い灰白色を呈し、磁器質である。107・108 は高台と高台内を除き灰釉を施し、全面に細かい貫入が入る。107 は高台端外側を面取りする。109 は体部上半に緑釉、下半に灰釉を掛け分ける。全面に細かい貫入が入る。

110 は高台際のはっきりしない器形の碗である。胎土は体部上半が灰色の強い灰白色、下半が黄味を帯びた灰白色である。高台と高台内を除き明オリーブ灰色の灰釉を施し、釉際の露胎部は明赤褐色を呈する。体部外面に鉄絵による笹文を描く。111 は黄味を帯びた灰白色を呈する緻密な胎土の碗である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施す。高台端外側は面取りする。文様部分は残存しないが、色絵が施されていた可能性がある。112 は黄味を帯びた灰白色を呈する粗い胎土の碗である。体部外面下部



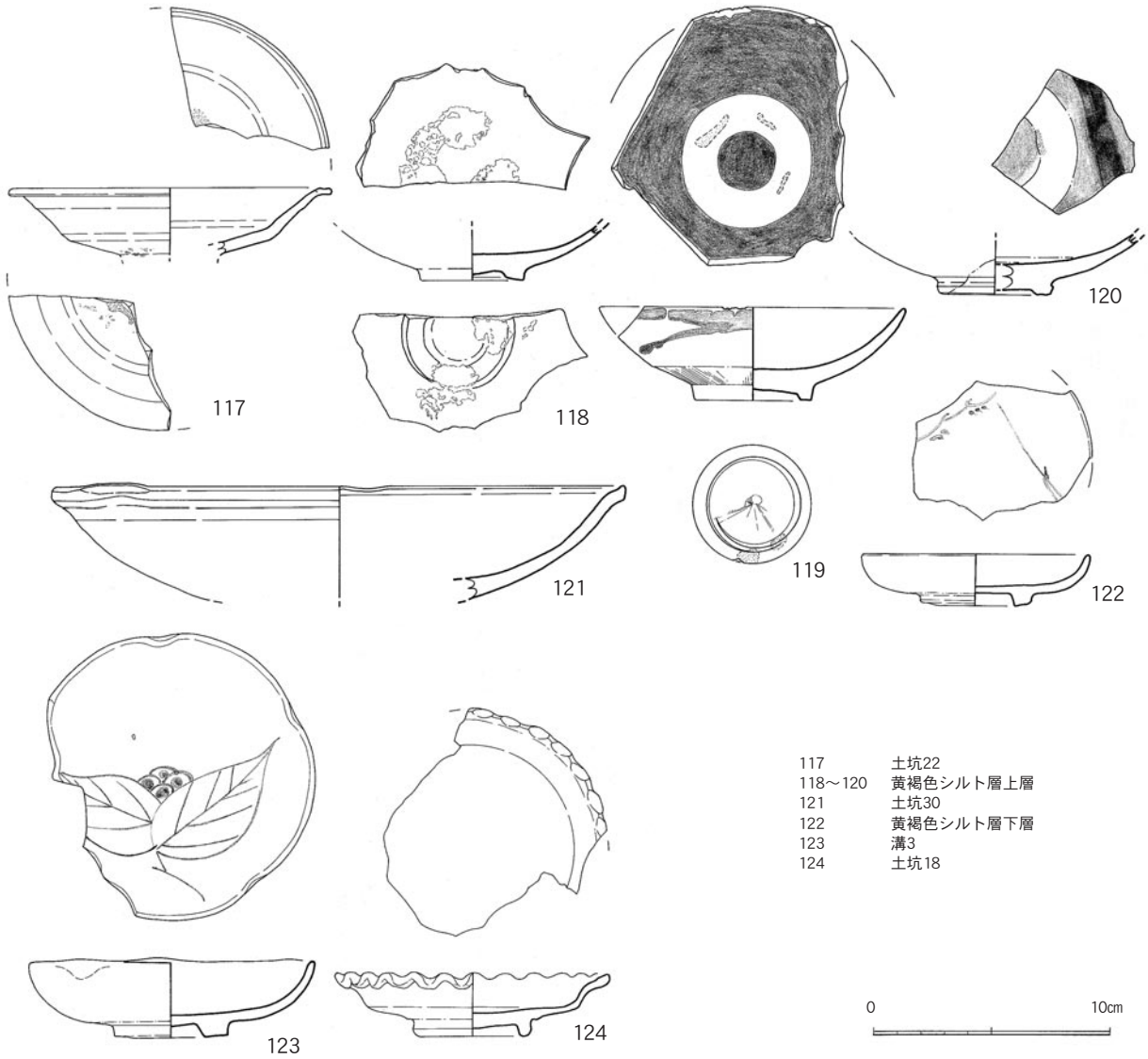
第 33 図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(2)（縮尺：１／３）

から高台内を除き灰釉を施す。体部はロクロ目が顕著で、中部に大きなくぼみをもつ。このくぼみは残存部に１箇所見られる。見込の中央部はわずかにくぼみ、高台内の中央部は明瞭な段をもちくぼむ。高台端外側は面取りする。全面に明瞭な貫入が入る。

４）萩焼碗、小坏類（第 33 図 113 ～ 116、図版第 19）

第 33 図 113 は萩焼の碗である。胎土は浅黄橙色を呈し、硬く焼き締まる。外面は白濁した釉と鉄釉によるピラ掛けで、内面には藁灰釉を施す。渦巻き高台で、高台端外側は面取りする。

114 ～ 116 は小坏である。114 は産地不明である。胎土は橙色を呈し、白色・黒色砂粒を多く含み粗く硬質である。内外面に刷毛目を施したのち、畳付を除き灰釉を掛ける。115 は蓮月焼と思われる。胎土は黄味の強い灰白色を呈し、緻密でやや硬質である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、釉際の露胎部は橙色を呈する。体部外面に文字を釘彫りする。体部内面下部に指で押さえたような痕跡があり、その部分の外面は変形する。切高台である。全面に細かい貫入が入る。116 は産地不明である。胎土は灰白色を呈し、精良な磁器質である。内面と高台内に灰釉を施し、外面には灰釉を散らす。高台端外側は面取りする。



第 34 図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(3)（縮尺：１／３）

５）皿類（第 34 図、図版第 20）

第 34 図 117 ～ 121 は肥前系の皿である。117 は灰釉溝縁皿である。胎土は灰白色を呈し、磁器質である。見込と高台際に砂目が見られる。118 は灰白色を呈する磁器質の胎土である。畳付を除き灰釉を施すが、一部釉薬は畳付にまでおよんでいる。見込と畳付に砂目が見られる。幅広の高台である。119 は青緑釉皿である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。口縁部外面から内面全体にかけて青緑釉を施し、体部外面上半には透明釉を施す。見込は蛇ノ目状に釉剥ぎし、釉剥ぎ部と畳付には砂目が見られる。体部外面下部と高台内はケズリの痕跡が顕著である。120 は黄味を帯びた灰白色の胎土である。高台と高台内を除き灰釉を施し、見込を蛇ノ目状に釉剥ぎする。釉剥ぎ部には砂目が見られる。幅広の高台である。全面に貫入が入る。121 は京焼風陶器の皿である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、やや硬質である。口縁部は型打成形の輪花となる。全面に細かい貫入が入る。

122・123 は京・信楽系の皿である。122 の口縁部は輪花になる可能性がある。胎土はやや白色の強い灰白色を呈し、磁器質である。体部外面下部から高台内を除き灰釉を施し、釉際の露胎部はにぶい橙

色を呈する。見込に鉄絵と上絵付の金または銀彩を施す。幅広の高台で、高台端外側は面取りする。全面に細かい貫入が入る。123 の口縁部は型打成形の輪花となる。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、磁器質である。体部外面下部から高台内を除き白化粧土を施したのち、灰釉を掛ける。見込に鉄絵と呉須による草花文を描き、ピン痕が１点見られる。幅広の高台である。全面に細かい貫入が入る。同じ遺構から同一規格品がもう１個体出土している。

124 は瀬戸・美濃系の皿である。胎土は灰白色を呈し、硬質である。体部外面下部から畳付を除き灰釉を施す。高台内には粗く灰釉を施す。口縁部は指で押さえて成形した輪花となる。全面に貫入が入る。

６）鉢類（第 35・36 図、図版第 20・21）

第 35 図 125 ～ 128 は肥前系の刷毛目の鉢である。125 は赤橙色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土である。内面と体部外面上半に刷毛目を施し、体部外面下半に鉄釉を施す。体部外面下部から高台内は無釉で、高台内外面と高台内の一部に白化粧土を掛ける。見込中央部は盛り上がる。126 はにぶい赤褐色を呈し、硬質な胎土である。内面は刷毛目装飾ののち緑釉を流し掛けている。口縁部外面は鉄釉を施し、胴部は無釉である。127 は橙色を呈する粗い胎土である。内面は刷毛目装飾ののち緑釉と鉄釉を流し掛けている。体部外面上半は鉄釉を施し、下半は無釉である。128 は橙色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土である。内面は刷毛目を施し、体部外面下半と高台内は鉄釉を刷毛掛けする。高台外面は無釉で、砂・胎土目が見られる。見込に砂が付着する。

129 ～ 131 は肥前系の三島手の鉢である。129 はにぶい赤橙色を呈するやや粗い胎土である。内面の三島手装飾は型押が弱く、印花文内にわずかに白化粧土が残るのみである。体部外面上部には鉄釉を施し、体部外面下半には鉄釉が口縁部に向かって流れるように施されている。130 はにぶい赤褐色の胎土である。内面の三島手装飾は印花文内にわずかに白化粧土が残るのみである。体部外面上部から内面は鉄釉を施すが、内面の施釉は粗く、一部露胎となる。体部外面下半には鉄釉を刷毛掛けする。131 は赤橙色を呈する粗い胎土である。内面の三島手装飾は印花文内にわずかに白化粧土が残るのみである。体部外面下半から高台内は、畳付を除き鉄釉を刷毛掛けする。見込に砂目が見られる。

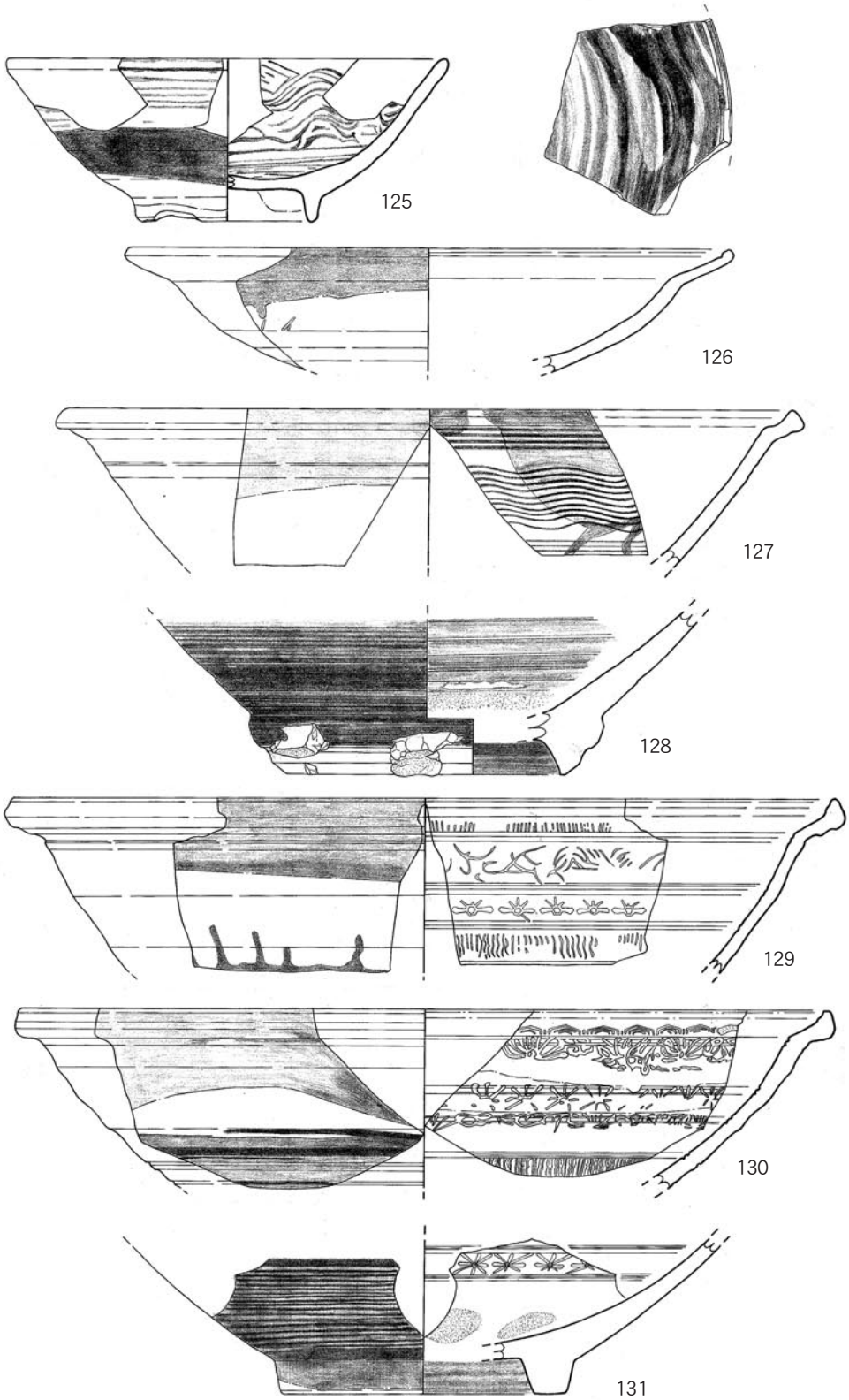
第 36 図 132 は京・信楽系の鉢である。型打成形による捻花状の輪花となり、碁笥底である。胎土は灰白色を呈し、硬質である。底部を除き灰釉を施す。全面に貫入が入る。

133 ～ 135 は備前焼の鉢である。133 はにぶい赤褐色の胎土である。体部外面にヘラ状工具で文様を施す。口縁端部に重ね焼きの痕跡が見られ、自然釉が掛かる。134 は蓋受け部をもつ鉢である。胎土は灰色を呈し、砂粒を多く含み粗い。全面に釉薬のような光沢をもつ塗土を施す。内面全体に自然釉が掛かる。135 は黄灰色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土である。体部には明瞭な指頭圧痕が見られる。内面は塗土を施していると思われる。

136 は備前焼の水指である。胎土は橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。見込中央部はややくぼみ、底部際外面は面取りする。内面はロクロ目が顕著である。

137 は備前焼のこね鉢である。胎土は芯部がにぶい赤褐色、表面近くが暗灰色を呈し、白色砂粒を多く含む。

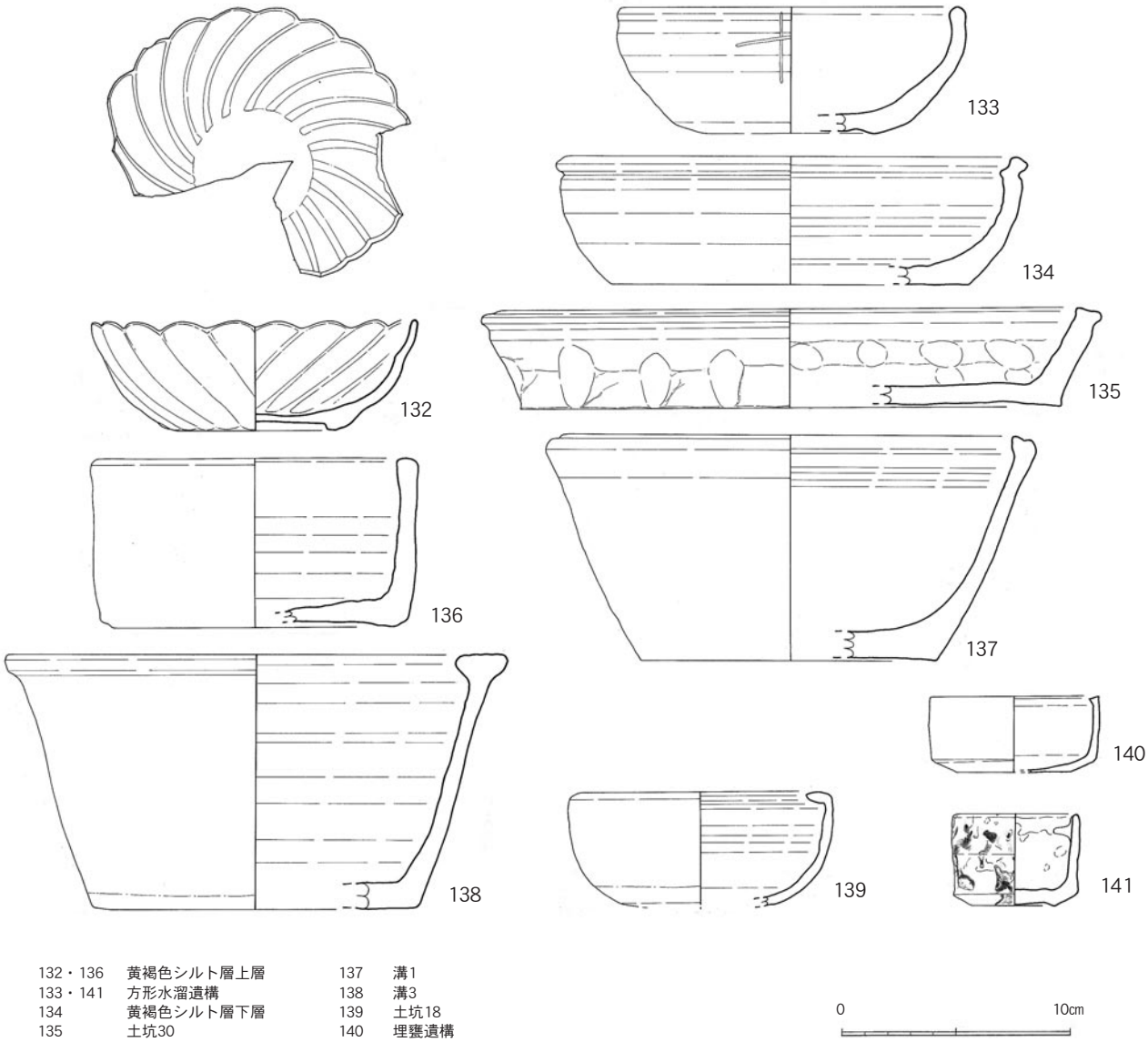
138 は産地不明の鉢である。胎土は赤褐色を呈し、白色砂粒を多く含む。底部外面を除き光沢のある鉄釉を施す。口縁部上面は粗く釉剥ぎされている。見込にわずかに砂が付着する。



125～127・129・131　灰色砂層
128・130　　黄褐色シルト層上層

0　10cm

第35図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(4)（縮尺：１／３）



第 36 図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(5)（縮尺：１／３）

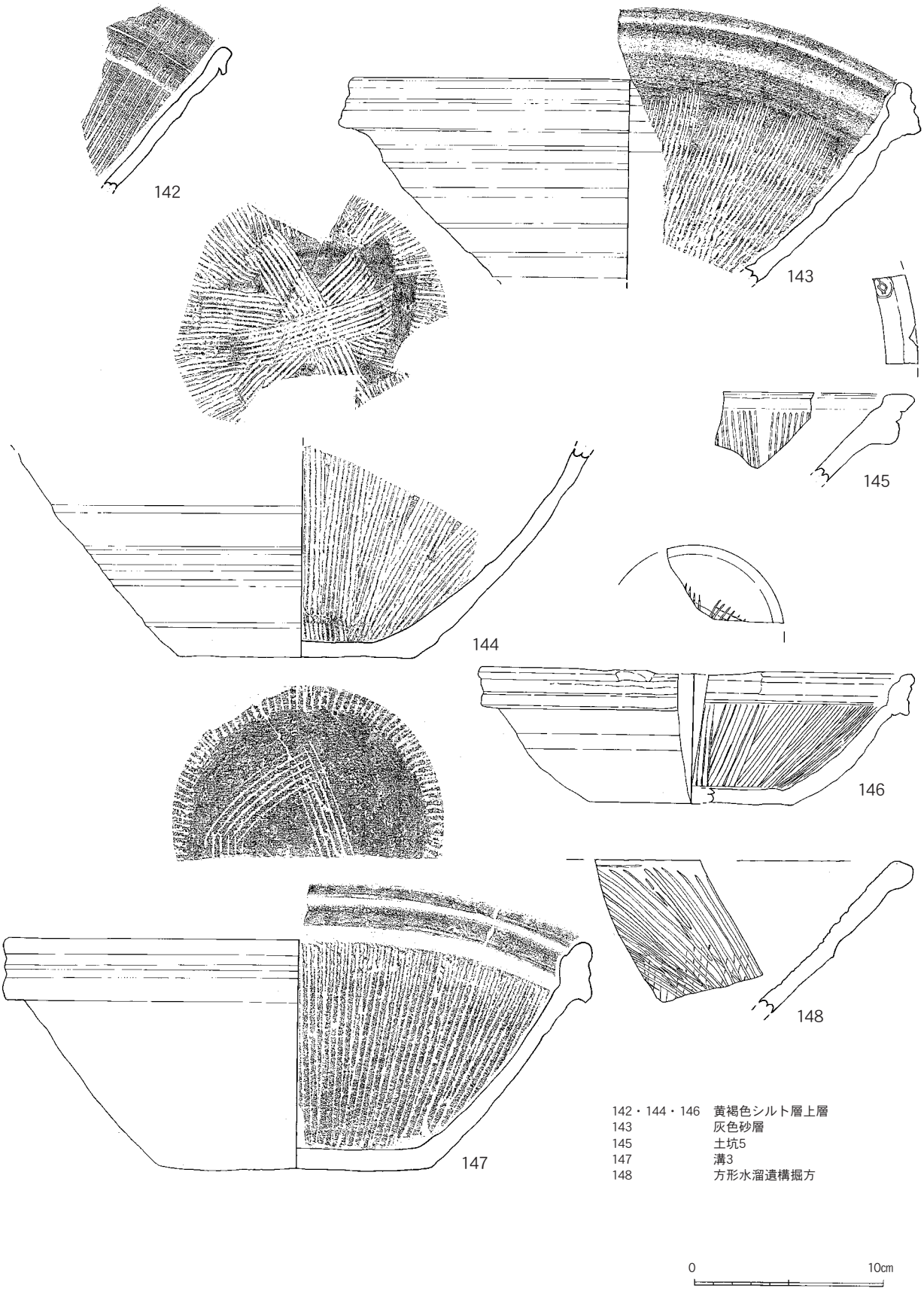
139 は関西系または瀬戸・美濃系の鉢類である。胎土は黄灰色を呈し、体部外面下部を除き鉄釉を施す。見込にはピン痕が１点見られる。火入れまたは線香立てと思われる。

140 は京・信楽系の合子である。胎土は灰白色を呈し、硬質である。底部外面を除き灰釉を施す。蓋受け部は粗く釉剥ぎされている。底部の釉際露胎部は橙色を呈する。全面に細かい貫入が入る。

141 は京・信楽系と思われる合子を転用した坩堝である。全面に鉄成分が付着し、外面には釉薬も付着する。

７）擂鉢（第 37 図、図版第 22）

第 37 図 142 は京・信楽系と思われる擂鉢である。口縁端部を外側へ折り返している。胎土は芯部が黄灰色、その外側がにぶい橙色、表面近くが浅黄橙色を呈し、緻密である。全面に鉄釉を施す。擂目は口縁部まで施され、上端はナデ消さない。外面はロクロ目が顕著である。



第 37 図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(6)（縮尺：１／３）

143 ～ 145 は備前焼の擂鉢である。143 は灰色の強い灰白色を呈し、白色・黒色砂粒を多く含む。擂目は 13 条 1 単位である。口縁帯のみ塗土を施す。口縁部上端と口縁帯下に重ね焼きの痕跡が見られる。ロクロ目が顕著である。144 は灰色の強い灰白色を呈し、白色・黒色砂粒を多く含む。擂目は 9 条 1 単位で深く施され、下端は見込の手前で終わる。見込の擂目はクロスパターンで、その一部は見込端を越え体部の擂目の下端に重なる。外面はロクロ目が顕著である。全面に降灰が見られる。145 は芯部が灰色の強い灰白色、表面近くが赤褐色を呈する。内外面に塗土を施す。口縁部上面に刻印が施されている。口縁帯下端に重ね焼きの痕跡が見られる。

146・147 は堺・明石系の擂鉢である。146 は片口をもつ。胎土は芯部が赤色、表面近くが褐灰色を呈し、白色砂粒を多く含む。擂目は 9 条 1 単位で、見込端で深くなり、下端は揃う。見込に焼き台の痕跡が見られる。147 は赤橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。擂目は 6 条 1 単位で、深く施され、下端は見込端で揃う。底部外面に焼き台の痕跡が見られる。

148 は産地不明の陶器質の擂鉢である。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、白色砂粒を多く含み粗い。無釉である。粘土紐による成形で、擂目は口縁部まで粗く施され、上端はナデ消さない。体部外面上半は粗いナデ調整である。

8）甕・壺（第 38・39 図、図版第 23）

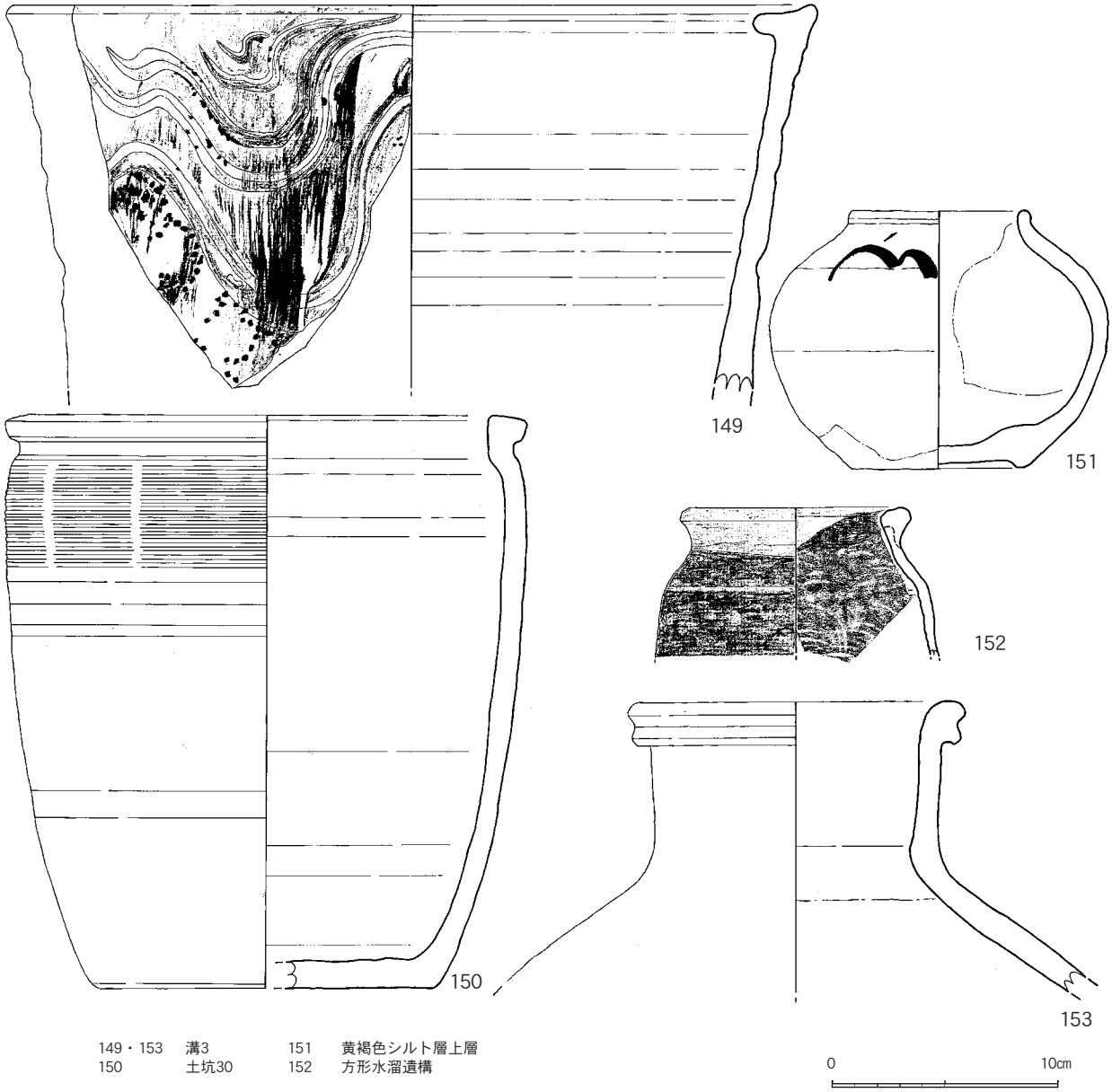
第 38 図 149 は瀬戸・美濃系の水甕である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、粗い。体部外面に丸ノミ状工具による流水文と刺突文を施す。内外面に灰釉を施したのち、外面に緑釉を流し掛ける。口縁部外面の端部は摩耗している。150 は備前焼と思われる甕である。胎土は芯部がにぶい橙色、表面近くが灰色を呈し、焼き締まる。体部外面上部には浅くカキ目を施す。内面には火襷が見られ、見込にはワラが付着する。口縁部上面に重ね焼きの痕跡が見られる。

151･152 は肥前系の壺である。151 は灰褐色とにぶい赤褐色を呈する硬質な胎土である。体部外面下部から底部外面を除き灰釉を施す。内面の施釉は粗く、一部露胎となる。口縁端部は無釉、または摩耗のため露胎となる。体部外面に鉄絵を描く。碁笥底である。152 は口縁部が浅黄橙色、胴部が灰色の強い灰白色を呈する粗い胎土である。口縁部と頸部内外面には鉄漿を施し、体部内外面には鉄釉を施す。内面にはタタキ成形による同心円状の文様が見られる。口縁部上面に重ね焼きの痕跡が見られる。153 は大谷焼の壺である。胎土はにぶい赤褐色を呈し、緻密で焼き締まる。外面から頸部内面に光沢のある鉄釉を施す。外面には降灰が見られる。

第 39 図 154 は大谷焼の大型の甕である。胎土は赤橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。内面下半と底部外面を除き鉄釉を施す。内外面下部には粘土接合痕が見られ、内面の接合痕の上部には板状の工具による調整が下から上へ時計回りに施されている。底部外面には砂が付着し、刻印と墨書が見られる。内面上部には幅約 15 ㎝、厚さ約 1.5 ㎝の帯状の石灰質が付着する。第 1 遺構面埋甕遺構に用いられたもので、便槽として使われたものと思われる。

9）瓶類、土瓶（第 40 図 155 ～ 160、図版第 24）

第 40 図 155 は肥前系の瓶である。胎土は暗赤灰色と暗灰色を呈し、硬質である。外面は鉄釉を掛けたのち刷毛目装飾を施し、さらに白化粧土を流し掛けている。内面は無釉であるが、一部鉄釉と白化粧土が流れ込んでいる。156 は肥前系の瓶の底部である。胎土はにぶい赤褐色を呈し、硬質である。外面



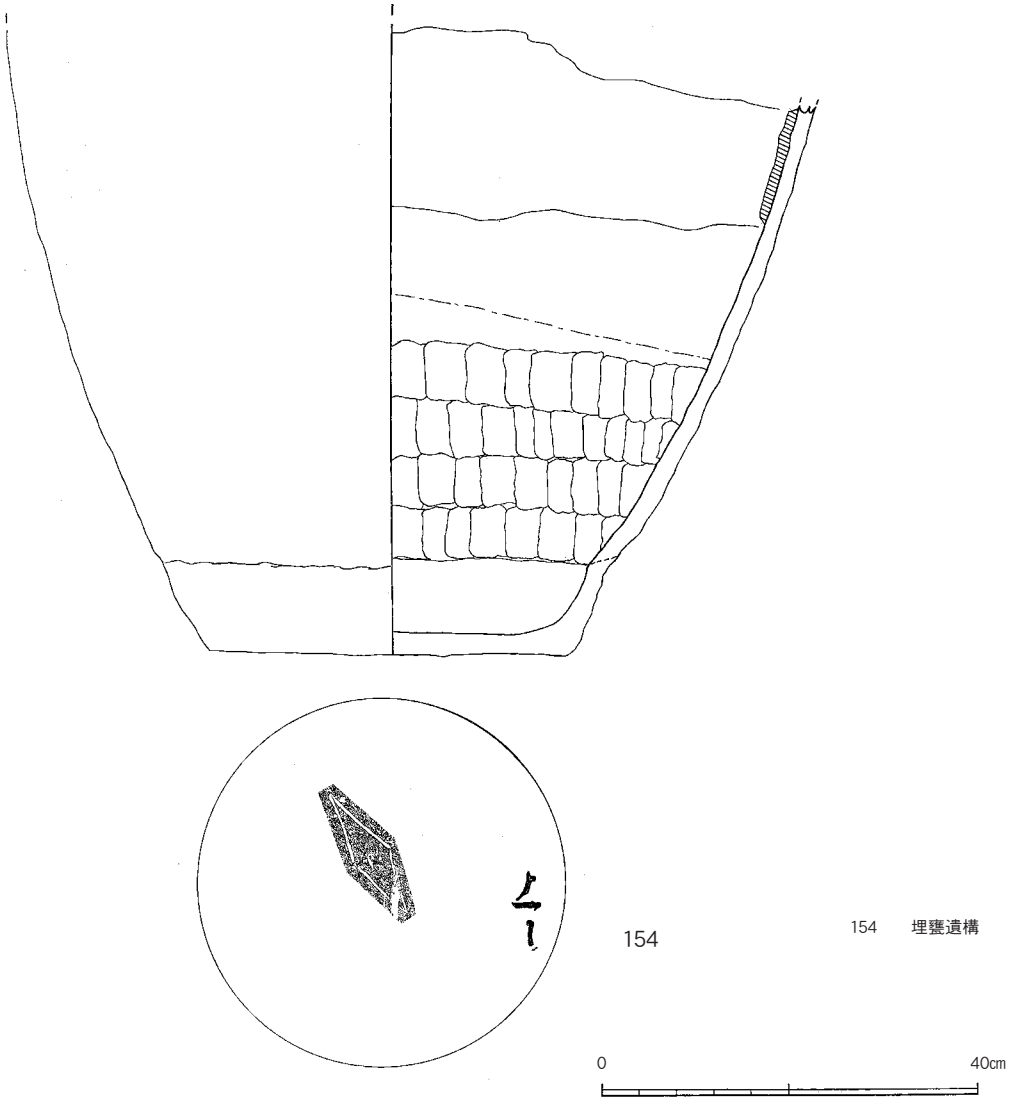
第38図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(7)（縮尺：１／３）

は鉄釉を施し、内面は無釉である。底部外面に刻印を施す。

157は大谷焼の瓶である。胎土は赤色を呈し、緻密で硬質である。外面は光沢のある鉄釉を施し、内面は無釉である。体部外面上部に文字を陰刻し、刻印を施す。

158は備前焼の瓶または油壺である。胎土は灰赤色を呈し、やや粗い。外面はやや光沢のあるにぶい赤褐色、内面は灰色を呈する。外面の最大径部に２条の沈線を施す。

159･160は産地不明の土瓶である。159は黄味を帯びた灰白色を呈するやや粗い胎土である。蓋受け部を除き灰釉を施すが、内面の施釉は粗く、一部露胎となる。体部外面に鉄絵を施す。160は橙色を呈する軟質な胎土である。内面と体部外面下半から底部外面を除き柿釉を施す。体部外面上部には飛鉋を施し、底部際外面には「富」の刻印を施す。外面の無釉部分にはススが付着する。



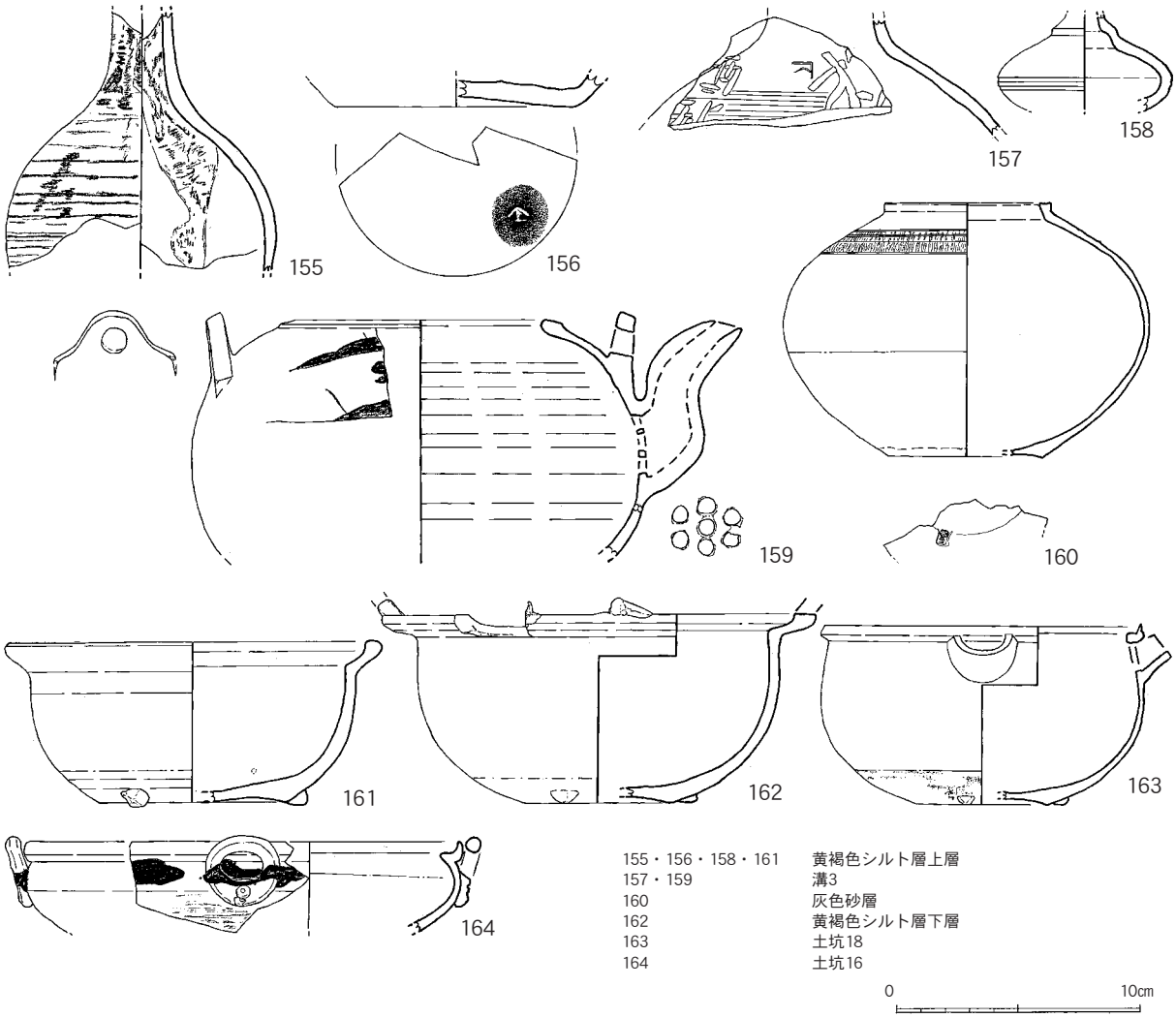
第 39 図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(8)（縮尺：１／８）

10）鍋類（第 40 図 161 ～ 164、図版第 24）

第 40 図 161･162 は産地不明の土鍋である。**161** は黄味を帯びた灰白色を呈する粗い胎土である。体部外面下部から底部外面を除き灰釉を施す。底部外面には円錐形の貼付けの足がひとつ残存し、底部内面にはピン痕が１点見られる。外面の無釉部分にはススが付着し、底部のススはタール状となっている。**162** は灰色の強い灰白色を呈する硬質な胎土である。体部外面下部から底部外面を除き鉄釉を施す。口縁端部には貼付けの把手がひとつ、底部外面には円錐形の貼付けの足がひとつ残存する。底部内面にはピン痕が１点見られる。外面の無釉部分にはススが付着する。

163 は産地不明の行平鍋である。蓋受け部の下をＵ字形に穿孔して注口を貼り付けている。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、硬質である。蓋受け部と体部外面下部から底部外面を除き灰釉を施す。底部外面には円錐形の貼付けの足がひとつ残存する。外面の無釉部分にはススが付着する。

164 は産地不明の土鍋である。胎土はにぶい黄橙色を呈し、粗い。外面には鉄釉を散らし、胴部内面には灰釉を施す。釉際の露胎部は橙色を呈する。体部外面上部には貼付けの把手風の装飾がひとつ残存



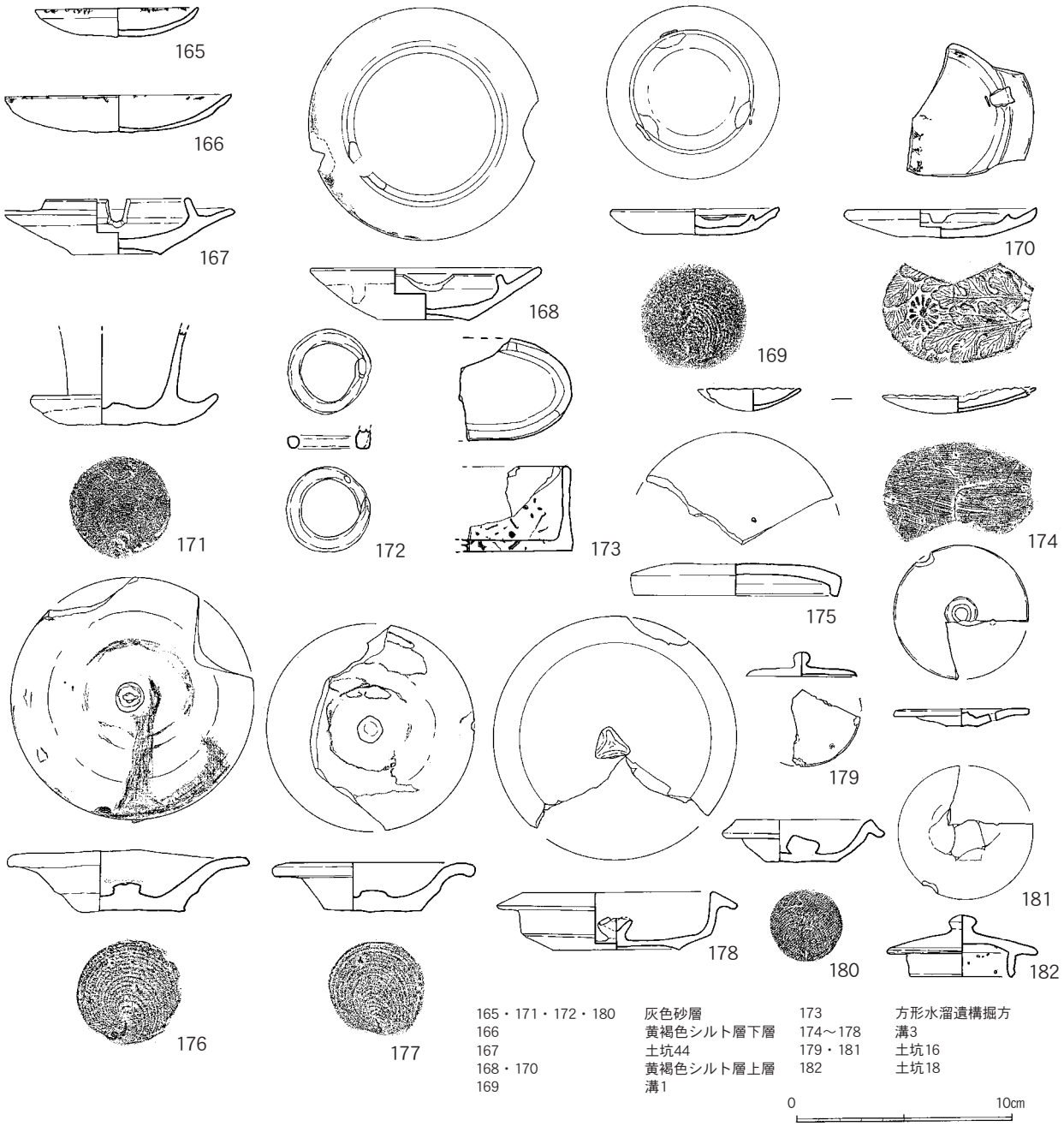
第40図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(9)（縮尺：１／３）

する。体部外面下半にはタール状のススが付着する。

11）灯明具（第41図165～172、図版第24）

第41図165･166は備前焼の灯明皿である。**165**は橙色を呈し、硬く焼き締まる胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて胎土と同色の塗土を施す。口縁部内外面に灯芯油痕が見られる。外面は回転ヘラケズリ調整である。**166**は芯部が灰色の強い灰白色、表面近くが灰色を呈し、硬く焼き締まる胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて灰褐色の塗土を施す。口縁部内外面には灯芯油痕がまだらに見られる。外面は回転ヘラケズリ調整である。ほぼ完形である。

167・168は京・信楽系の灯明受皿である。**167**は灰色の強い灰白色を呈する硬質な胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて灰釉を施し、口縁部を除いた外面と内面の仕切の端部は無釉である。釉際の処理は直線的に揃う。内面の仕切にはU字形の切込が１箇所入り、仕切端部の内側には砂が付着する。底部外面は同心円ケズリ調整で、やや上げ底である。**168**は浅黄橙色を呈する緻密な胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて灰釉を施し、口縁部を除いた外面と内面の仕切の端部は無釉である。外面の釉際露胎部は橙色を呈する。内面の仕切にはU字形の切込が１箇所入る。切込付近の口縁部内外



第41図　地域共同研究センター棟地点出土陶器(10)（縮尺：１／３）

面にはススが付着する。底部外面は同心円ケズリ調整で、やや上げ底である。ほぼ完形である。

169・170は備前焼の灯明受皿である。169はにぶい赤褐色を呈し、硬く焼き締まる胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて胎土と同色の塗土を施す。内面の仕切は低く、U字形の切込が３箇所入る。灯芯油痕は見られない。底部には回転糸切り痕が見られる。完形である。170は橙色の胎土である。口縁部外面から内面全体にかけて胎土と同色の塗土を施す。内面の仕切は断面三角形で、U字形の切込が１箇所見られる。口縁部内面と仕切の内側に灯芯油痕が見られる。外面は回転ヘラケズリ調整である。

171は産地不明の灯明具である。胎土は橙色を呈し、硬質である。受皿部外面の下半から底部外面を除き灰釉を施す。底部には回転糸切り痕が見られる。

172 は産地不明の灯芯押さえである。胎土は灰色を呈し、硬質である。底部を除き鉄釉を施す。

12）**その他**（第 41 図 173 ～ 182、図版第 24）

第 41 図 173 は瀬戸･美濃系の鬢水入れである。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、粗く硬質である。底部外面を除き灰釉を施す。体部外面に鉄絵による摺絵を２方向に施す。全面に貫入が入る。

174 は備前焼と思われるが、器種は不明である。胎土は赤橙色を呈し、精良で硬く焼き締まる。内面は胎土と同色の塗土を施し、型押による菊文を施す。外面は粗いナデ調整である。

175 は京・信楽系の蓋物または段重の蓋である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、硬質である。口縁端部と内面を除き灰釉を施す。蓋の上面にピン痕が１点見られる。

176 は産地不明の壺の蓋である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、粗い。無釉である。つまみ周辺部に鉄釉と砂が環状に付着し、重ね焼きされたと思われる。蓋の外側とつまみ上面にも鉄釉が付着し、蓋の内側には降灰が見られる。底部には回転糸切り痕が見られる。177 は産地不明の壺の蓋と思われる。胎土は 176 と同じである。施釉されていたと思われるが、焼成不良のため釉薬は焼け飛んでしまっている。つまみ周辺部に鉄釉が環状に付着し、重ね焼きされたと思われる。つまみ周辺以外の蓋の内側と外側にも鉄釉が付着する。底部には回転糸切り痕が見られる。

178 は産地不明の水注の蓋である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。蓋の内側に灰釉を施し、外側は無釉である。細かい貫入が入る。179 は珉平焼の水注の蓋である。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、磁器質である。全面に黄釉を施し、細かい貫入が入る。蓋の上部に穿孔が１箇所、下面にハリ支えが１点見られる。

180 は産地不明の土瓶の蓋である。胎土は橙色を呈し、緻密である。蓋の内側に柿釉を施し、外側は無釉である。底部には回転糸切り痕が見られる。ほぼ完形である。181 は産地不明の焼締陶器で、土瓶または急須の蓋である。胎土は黄味を帯びた灰白色である。蓋の内側は丁寧なミガキが施され平滑である。底部はロクロ成形後、ヘラで面取りしている。蓋の上部に穿孔が１箇所見られる。182 は京・信楽系の土瓶の蓋である。胎土は黄味を帯びた灰白色を呈し、硬く焼き締まる。外面に緑釉を施し、内面は無釉である。

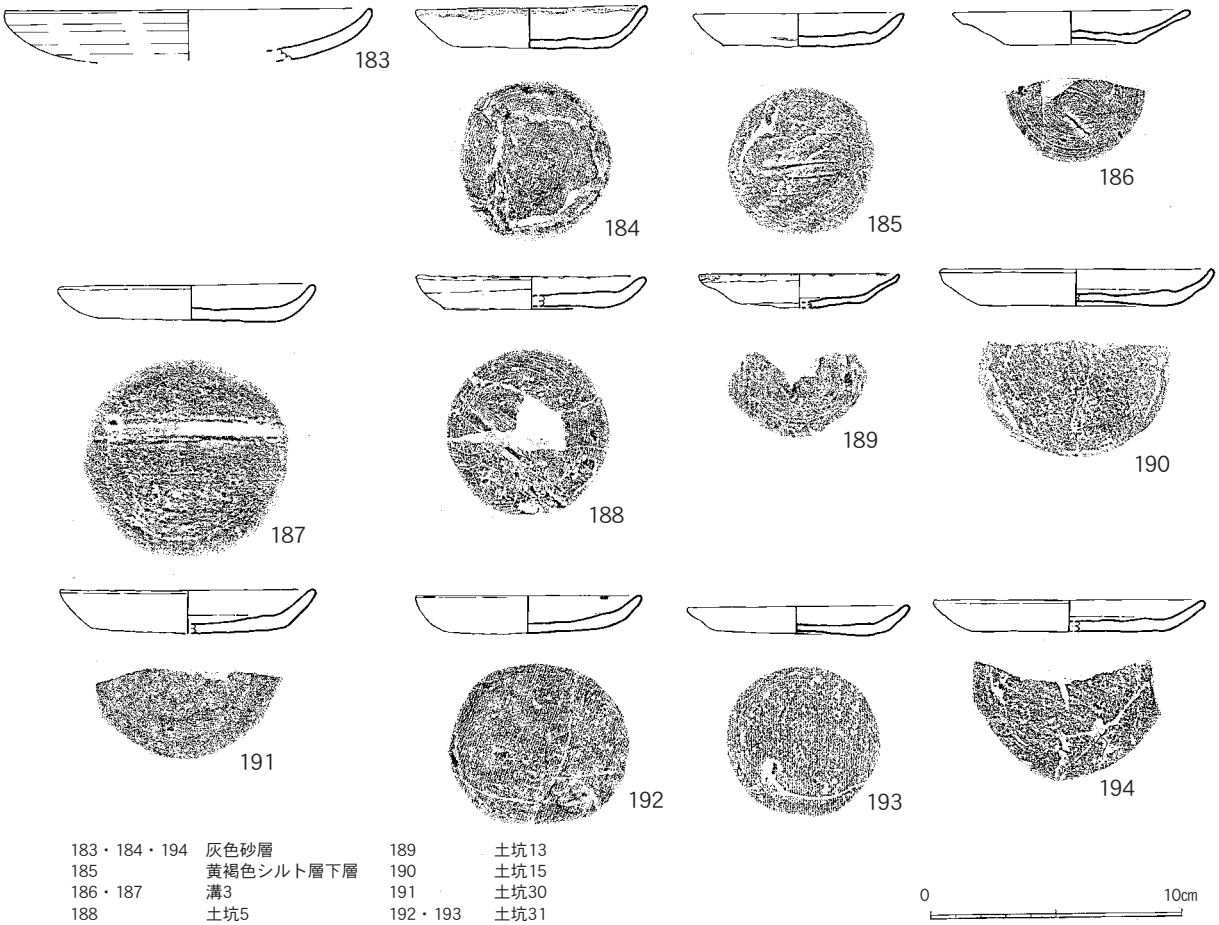
3.　土器・土製品

１）**皿類**（第 42 図、図版第 25）

皿類には土師質のものと瓦質のものがある。

第 42 図 183 ～ 193 は土師質の皿である。183 は黄味を帯びた灰白色を呈する粗い胎土である。全面に薄いオリーブ色の彩色を施す。

184 ～ 189 は灯明皿である。184 は浅黄橙色を呈する粗い胎土である。口縁部内外面全体にタール状の灯芯油痕が見られ、底部には回転糸切り痕が見られる。185 は黄味を帯びた灰白色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。残存する口縁端部には灯芯油痕が１箇所見られ、内面にはわずかにススが付着する。底部には回転糸切り離し後、板目状圧痕が見られる。186 は黄味を帯びた灰白色を呈する緻密な胎土である。器壁は薄く、外面の体部と底部の境は明瞭で、上げ底である。残存部に灯芯油痕は見られないが、内面にススが付着し、灯明皿であったと思われる。底部には回転糸切り痕が見られる。187 は黄味を帯



第42図　地域共同研究センター棟地点出土土器(1)（縮尺：１／３）

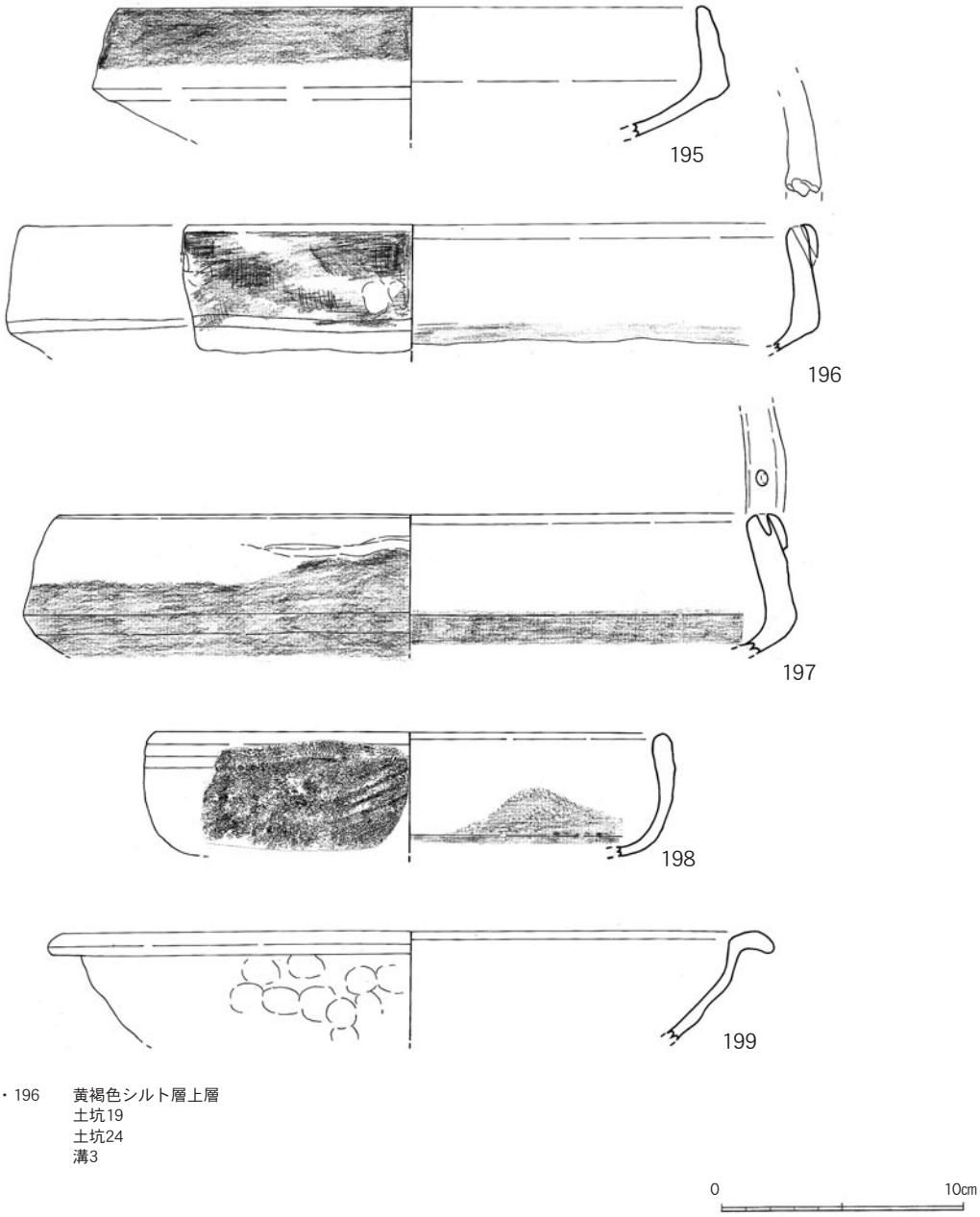
びた灰白色を呈し、金雲母・赤色砂粒などを多く含む胎土である。残存する口縁端部には灯芯油痕が１箇所見られる。底部には回転糸切り離し後、板目状圧痕が見られる。188は浅黄橙色を呈し、金雲母と白色砂粒を多く含む粗い胎土である。内面の体部と底部の境目がやや盛り上がる。口縁端部には灯芯油痕が見られ、内面にはススが付着する。底部には回転糸切り離し後、板目状圧痕が見られる。189は浅黄橙色の胎土で、器壁は薄く小型である。口縁端部に灯芯油痕がまだらに見られる。底部には回転糸切り離し後、板目状圧痕が見られる。

190は浅黄橙色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。内面の体部と底部の境目が盛り上がる。残存部に灯芯油痕は見られない。底部には回転糸切り離し後、板目状圧痕が見られる。

191･192は灯明皿である。191は黄味を帯びた灰白色の胎土である。内面の体部と底部の境目が盛り上がる。口縁部内外面に灯芯油痕が見られ、内面全体にススが付着する。底部には回転糸切り痕が見られる。192は黄味を帯びた灰白色を呈する緻密な胎土である。残存する口縁部内面には灯芯油痕が１箇所見られる。底部には回転糸切り痕が見られる。

193は浅黄橙色を呈し、金雲母と赤色砂粒を含む胎土である。残存部に灯芯油痕は見られない。底部には回転糸切り痕が見られ、明瞭な糸切り離しの痕跡がつく。

194は瓦質の灯明皿である。胎土は黒褐色を呈し、粗い。内面の体部と底部の境目が盛り上がる。残存する口縁端部には灯芯油痕が１箇所見られる。底部には回転糸切り離し後、板目状圧痕が見られる。

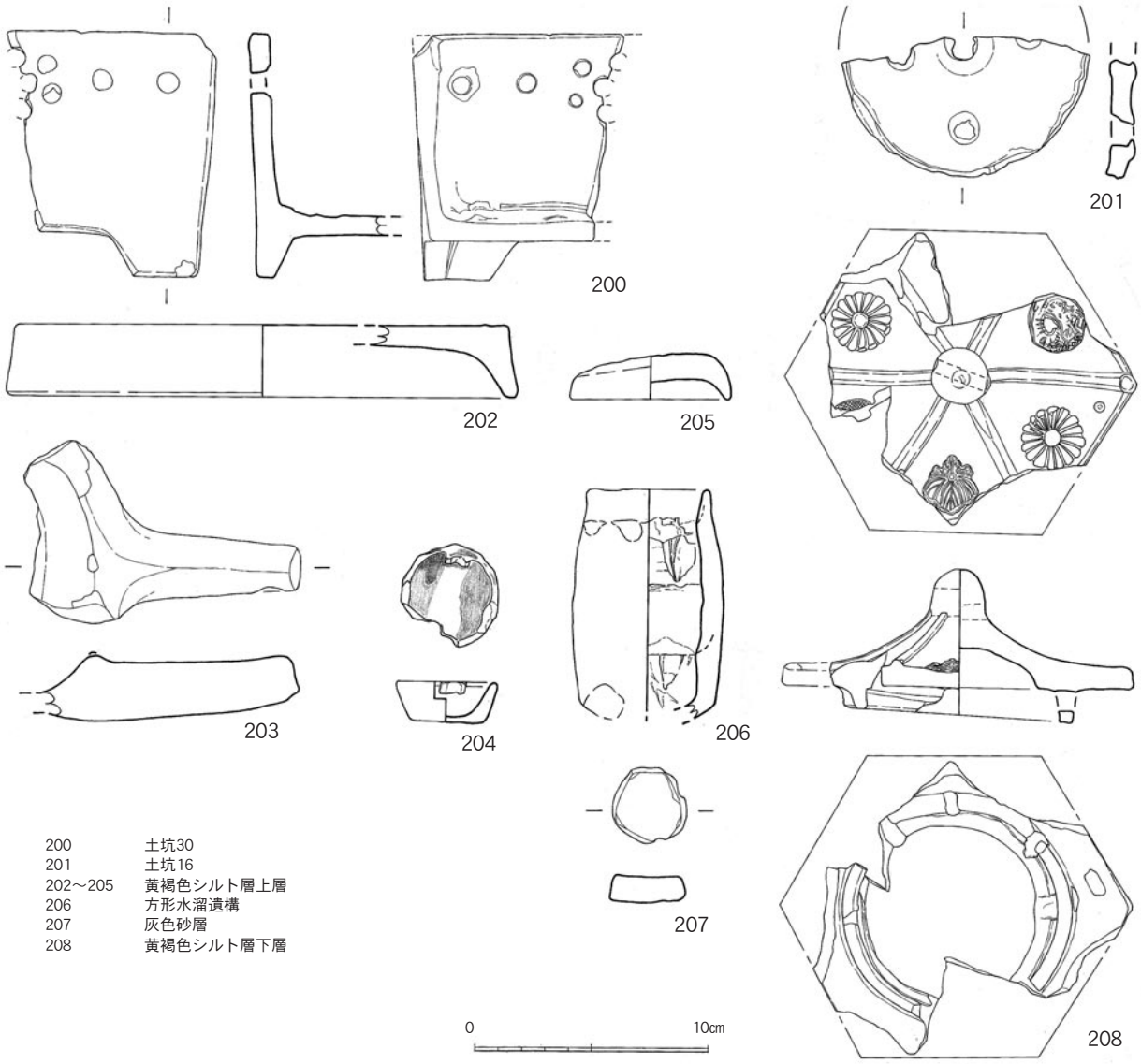


第 43 図　地域共同研究センター棟地点出土土器(2)（縮尺：１／３）

２）焙烙（第 43 図、図版第 26）

焙烙には土師質のものと瓦質のものがある。

第 43 図 195 ～ 198 は土師質の焙烙である。195 はにぶい橙色を呈し、金雲母・白色砂粒などを多く含む粗い胎土である。外面の体部と底部の境目は明瞭で、体部は回転ナデ調整を施す。体部外面にススが付着する。196 は橙色を呈し、金雲母と白色・赤色砂粒を含む胎土である。口縁上端面から体部外面の下方斜め方向に貫通する穿孔が１箇所見られる。穿孔部分の外面は粘土貼付けのため肥厚し、接合痕が見られる。体部は回転ナデ調整である。外面全体にススが付着し、底部内面に炭化物が付着する。197 はにぶい褐色を呈し、金雲母と白色・赤色砂粒を少量含む胎土である。口縁上端面に貫通しない穿孔が１箇所見られる。穿孔部分の外面は粘土貼付けのため肥厚し、接合痕が見られる。外面には体部と



第 44 図　地域共同研究センター棟地点出土土器(3)（縮尺：１／３）

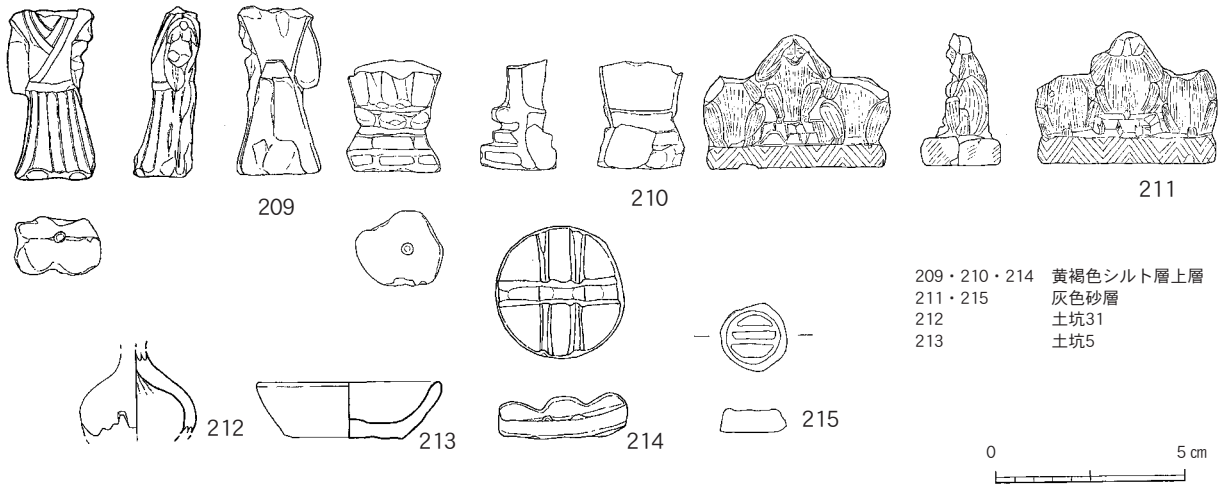
底部の接合痕が明瞭に見られる。体部は回転ナデ調整である。外面下半から底部外面にかけてススの付着が顕著で、底部内面には炭化物が付着する。198 はにぶい橙色を呈し、金雲母と白色・赤色砂粒を含む胎土である。口縁部を除いた体部外面から底部外面にかけて、右上がりのタタキ痕が見られる。体部と底部の境目は丸みをもち不明瞭で、口縁端部は丸くおさめる。体部外面にはススが付着し、特に口縁部のススはタール状である。体部内面から底部内面にかけては炭化物が付着する。

199 は瓦質の焙烙である。胎土は灰白色を呈し、白色砂粒を含む。口縁部内外面と胴部内面はナデ調整により平滑であるが、胴部外面は指頭圧痕が顕著である。

３）その他の土器（第 44 図、図版第 27）

第 44 図 200 は瓦質の火鉢・焜炉類である。体部は板作りの角型で、足は貼付けである。胎土は黄味を帯びた灰白色である。体部上部に７箇所の穿孔が見られ、外面は丁寧なミガキ調整である。

201 は土師質のさなである。胎土は橙色と灰褐色を呈し、白色砂粒を含む。残存部には４箇所の穿孔が見られ、両面にススが付着する。**202** は土師質の火消し壺の蓋である。胎土は橙色を呈し、白色・赤



第45図　地域共同研究センター棟地点出土土製品（縮尺：１／２）

色砂粒のほか金雲母を多く含む。蓋の上面を除く外面と内面は回転ナデ調整により平滑である。蓋の上面には粘土の接合痕が見られる。203は土師質の十能である。胎土は橙色を呈し、金雲母と白色・赤色砂粒を含む。体部は型作りで、柄は手捏ねののち強いナデ調整が施されている。

204は土師質の秉燭である。胎土は橙色を呈し、微細な白色砂粒を含み緻密である。型押成形で、内面上部には中央部に穿孔をもつ板状の芯立が貼り付けられていたと思われる。内面と芯立上面には柿釉が施されるが、芯立の真下の内面には釉薬が掛かっていない。

205は土師質の焼塩壺の蓋である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母と石英および白色・赤色砂粒などを多く含み粗い。型作りで、内面は布目などの調整痕はなく平滑である。内面は橙色を呈する。輪積み成形の身に対応する蓋である。206は土師質の焼塩壺である。胎土は橙色を呈し、白色・赤色砂粒を多く含む。輪積み成形で、外面はナデ調整により平滑に仕上げられ、内面は口縁部のみ強いヨコナデで、体部は粗いナデ調整により粘土接合痕を残す。残存部に刻印は見られない。内面は赤味を帯びた橙色を呈する。

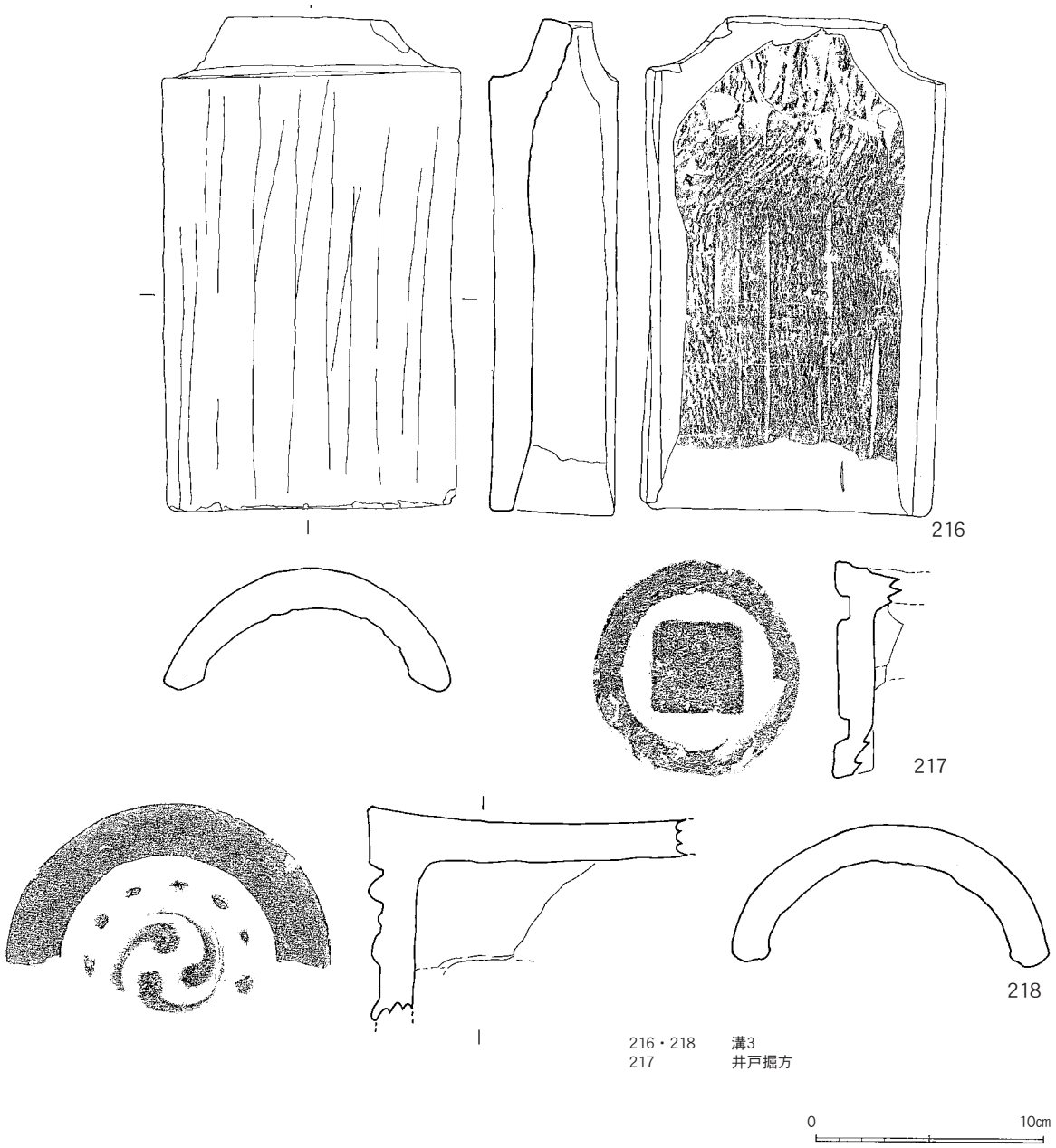
207は土師質の加工円盤である。胎土は橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。やや角をもつが、側面は丁寧に調整されている。

208は土師質の釣り灯籠の屋根部分である。胎土はにぶい橙色を呈し、白色砂粒を含み硬く焼き締まる。内面中央部とかえり端部を除き褐色の釉薬を施す。外面中央の突起部は横方向に貫通する穿孔をもち、かえりには５箇所の穿孔が見られる。内面にススが付着する。

４）土製品（第45図、図版第27）

第45図209は裃姿の土人形である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母と白色砂粒を含む。中実の前後型合わせ成形で、底部に穿孔する。背面に赤色の彩色痕が見られる。210は不動明王と思われる土人形である。胎土は浅黄橙色を呈し、緻密である。中実の前後型合わせ成形で、底部に穿孔する。底部を除き銀彩の痕跡が見られる。211は三猿の土人形である。胎土はにぶい橙色を呈し、精良である。中実の前後型合わせ成形である。全面に銀彩の痕跡が見られる。

212は土鈴である。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母と白色砂粒を含む。手捏ねで、外面に指紋の痕跡が見られる。



第46図　地域共同研究センター棟地点出土瓦(1)（縮尺：１／３）

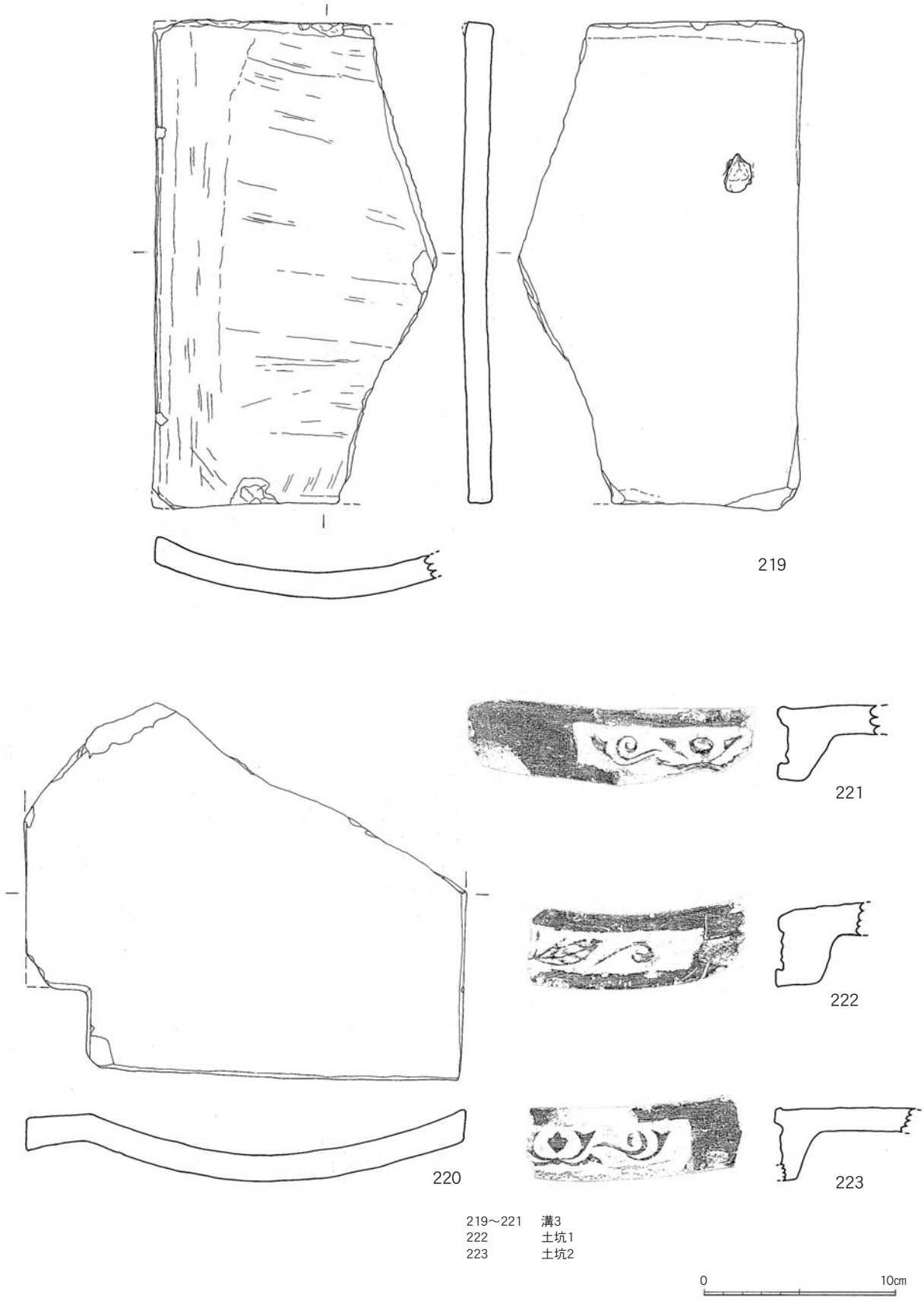
213は、土師質のミニチュア鉢である。胎土はにぶい黄橙色を呈し、緻密である。型押成形で、内外面は回転ナデ調整により平滑に仕上げられている。底部外面を除き金または銀彩の痕跡が見られる。214はミニチュア羽釜の蓋である。胎土は橙色である。型押成形で、完形である。

215は泥面子（面打）である。胎土は橙色を呈し、白色･赤色砂粒を含む。「丸ノ内ニ二ツ引キ」の家紋を型押する。完形である。

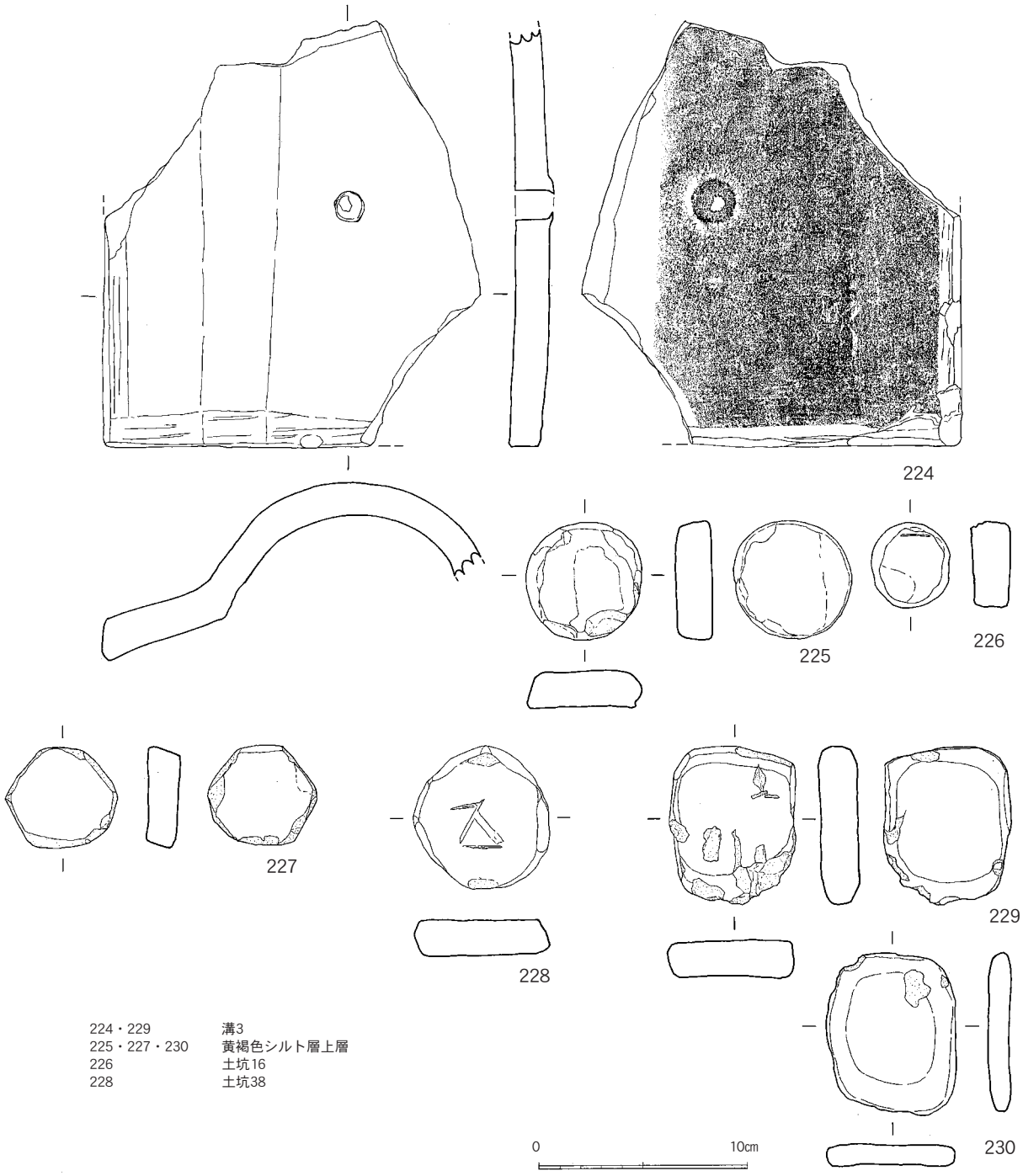
4. 瓦

1）丸瓦・軒丸瓦（第46図、図版第28）

第46図216は丸瓦である。胎土は灰色である。凸面は縦位の粗いヘラナデ調整、凹面は横位の叩き



第 47 図　地域共同研究センター棟地点出土瓦(2)　（縮尺：１／３）



第 48 図　地域共同研究センター棟地点出土瓦(3)（縮尺：１／３）

板ののち布目痕と横位の条線が見られる。完形である。**217**･**218** は軒丸瓦である。**217** は灰色の強い灰白色を呈し、金雲母と白色砂粒を含む胎土である。瓦頭部は「丸ノ中角持チ」の家紋である。**218** は灰色の強い灰白色を呈し、白色・黒色砂粒を多く含む。凸面は縦位の丁寧なヘラナデ調整、凹面は棒状刺突ののち縦位の叩き板、さらに弱い布目痕と横位の条線が見られる。

２）平瓦・軒平瓦・桟瓦・軒桟瓦（第 47・48 図 224、図版第 28）

第47図219 は平瓦である。胎土は灰色の強い灰白色を呈し、金雲母と白色砂粒を含む。**220** は桟瓦である。胎土は灰白色を呈し、白色・黒色砂粒を多く含む。**221** は軒平瓦である。胎土は灰色の強い灰白

色を呈し、白色砂粒を含む。**222・223** は軒平または軒桟瓦である。**222** は灰白色を呈し、金雲母と白色砂粒を含む胎土である。唐草文の表面は摩耗している。**223** は灰色の強い灰白色を呈し、白色砂粒を多く含む胎土である。**第 48 図 224** は灰色の強い灰白色の胎土である。凸面は丁寧なヘラナデ調整、凹面には細かい布目痕が見られる。上部に穿孔する。

３）加工円盤、二次加工品（第 48 図 225 ～ 230、図版第 28）

第 48 図 225 ～ **229** は加工円盤である。**225** は灰色を呈し、金雲母と白色砂粒を含む胎土である。側面は丁寧な調整を行い、整った円形に再加工されている。**226** は灰色の強い灰白色を呈し、金雲母と白色・黒色砂粒を含む胎土である。側面は丁寧な調整を行い、整った円形に再加工されている。**227** は灰色の強い灰白色を呈し、金雲母を含む胎土である。側面は１面を除き調整を行うが、角を残したままで六角形をなす。加工途中のものであろうか。**228** は灰色の強い灰白色を呈し、黒色砂粒を含む胎土である。円形ではあるが、側面の調整はあまり丁寧ではない。片面に浅く線刻を施す。**229** は灰色の強い灰白色を呈し、金雲母を含む胎土である。側面は調整を行い丸みをもつ部分と、削り取ったままの角が残る部分とがあり、円形に加工途中のものと思われる。

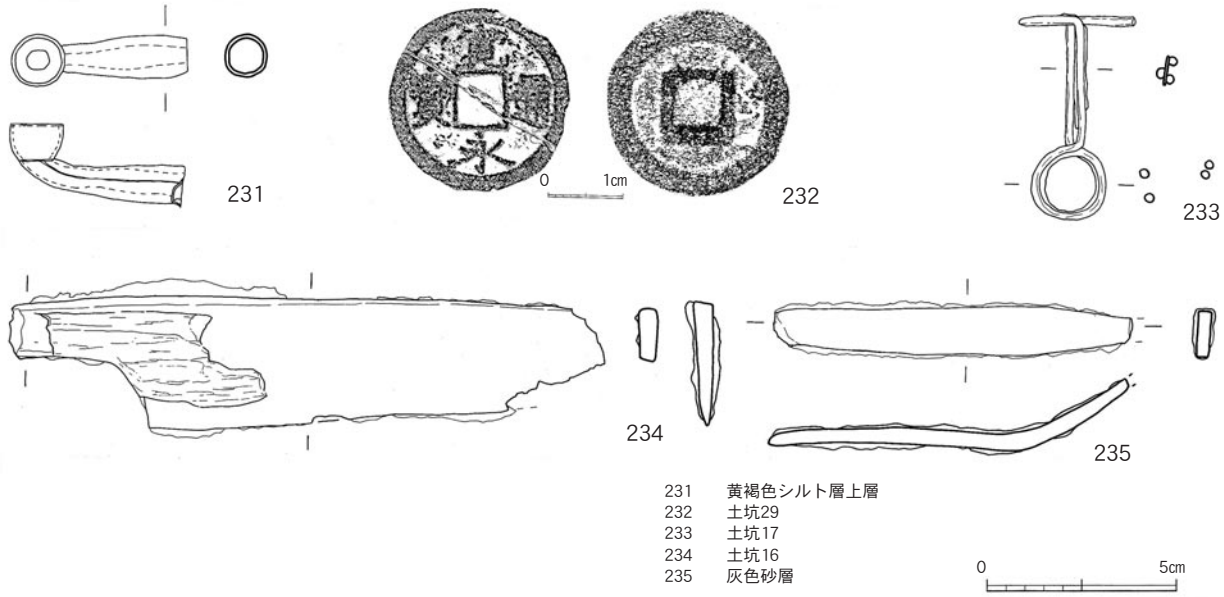
230 はにぶい橙色を呈し、金雲母を含む胎土である。側面と表面に調整が行われ、角に丸みをもつ薄い方形の製品に再加工されたものである。

５．金属製品・石製品・特殊遺物

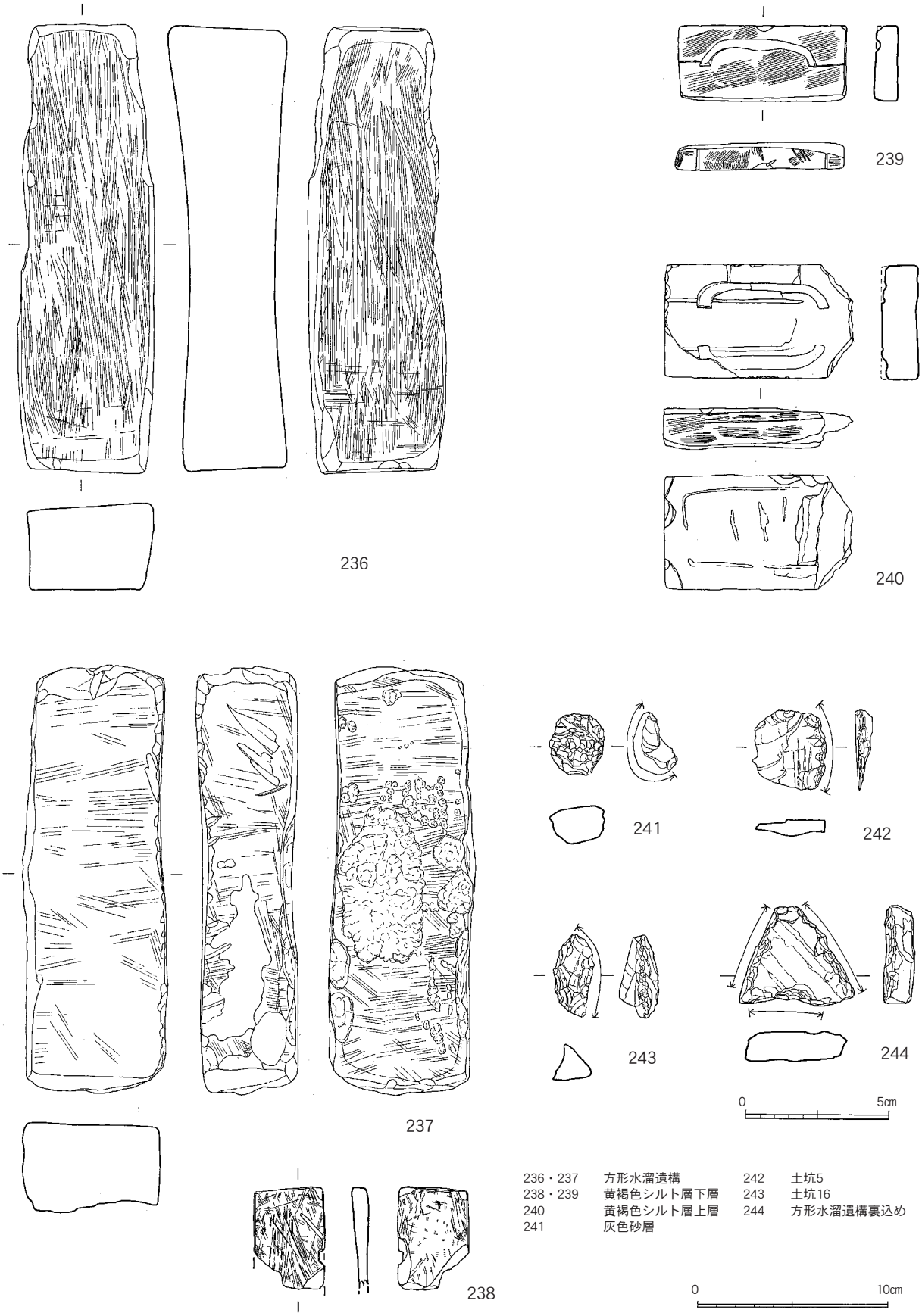
１）金属製品（第 49 図、図版第 29）

金属製品には青銅製品と鉄製品がある。

第 49 図 231 は青銅製煙管の雁首である。**232** は寛永通宝である。いわゆる古寛永銭である。背面に文様は見られない。**233** は径３㎜の鉄の棒の中央部を環状に曲げてフック状にした製品であるが、用途は不明である。**234** は鉄製の刃物である。刃部から関にかけて柄の木質が付着する。刃部は先端から関

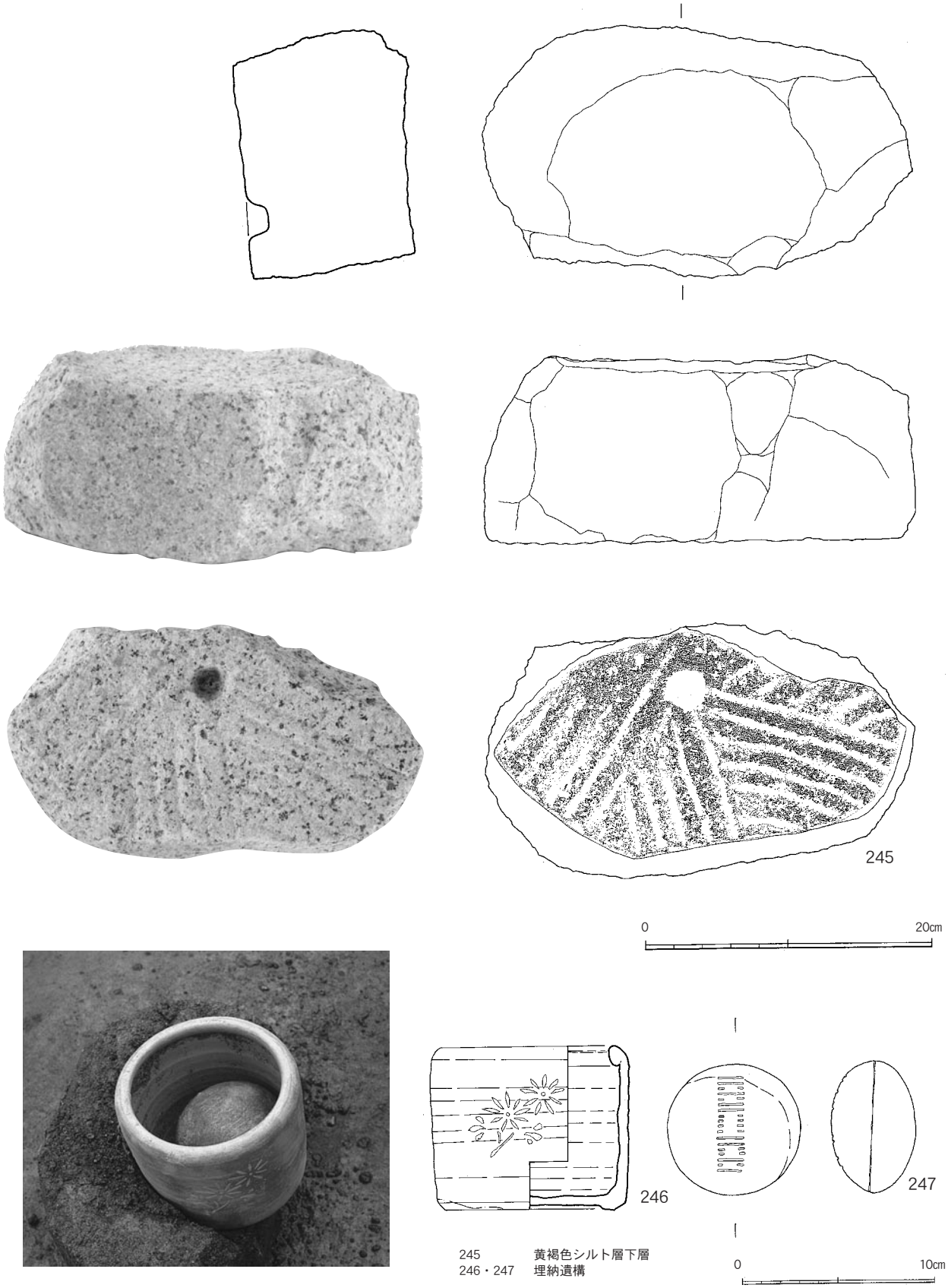


第 49 図　地域共同研究センター棟地点出土金属製品（縮尺：１／２、232 は１／１）



236・237	方形水溜遺構	242	土坑5
238・239	黄褐色シルト層下層	243	土坑16
240	黄褐色シルト層上層	244	方形水溜遺構裏込め
241	灰色砂層		

第50図　地域共同研究センター棟地点出土石製品（縮尺：１／３、241～244は１／２）



第51図　地域共同研究センター棟地点出土石臼・特殊遺物（245は縮尺：１／４、246・247は１／３）

にかけて広がるもので最大の幅は５㎝ある。形状からは包丁だと推測されるが刃部には厚みがあり、小刀を連想させる。235 は一端が鑿のように狭まる形状の鉄製品である。用途は不明である。

２）石製品（第 50・51 図 245、図版第 29）

石製品には砥石、鋳型、火打ち石および石臼がある。

第 50 図 236 ～ 238 は砥石である。236 と 237 は寸法からみて置き砥石であろうと思われるが、236 の研ぎ面には無数の直線状の削痕が認められるのに対し、237 の研ぎ面は平滑であることから、前者を荒砥、後者を仕上砥とみなすことができる。238 は持ち砥石であろうが、研ぎ面には 236 と同様の直線的な削痕が認められる。石材は 236 が頁岩、237 が砂岩、238 が凝灰岩である。

239 と 240 は鋳型である。２点ともに彫り込まれた窪みの形状は、あたかも箪笥の把手のように両端が湾曲する点で共通しており、表面をみると、端面の部分には細い棒を添えて小孔を貫通させるための直線的な溝が認められる。類例にあたってみると、ここから鋳出される製品は漁網錘であることが判明した。イワと呼ばれる投網用の鉛錘を製作するための鋳型であるとみなしうる。なお239の側面には両端付近に直線状の溝が彫り込まれており、本例が合わせ鋳型であった可能性を示唆するが、240 にはそのような造作は認められない。239 の石材は藍閃石－塩基性片岩であり、おそらく本来は砥石であったものが鋳型に転用されたものであると推測される。いっぽうの 240 は粘板岩製であり、裏面には縁辺から 1.5 ㎝前後の幅をもってコの字状の溝が残ることから、本来は硯であったことがわかる。硯から（可能性としては一旦砥石に転用されたものが再度）鋳型に転用されたのであろう。

241 ～ 244 は淡緑色チャート製の火打ち石である。矢印で示した面に削痕や敲打痕が認められる。重量は 241 が 5.58 ｇ、242 が 4.40 ｇ、243 が 4.28 ｇ、244 が 19.31 ｇである。その寸法・重量・形状からみて、241 ～ 243 までは使用の過程で再分割を経たものであろうと思われるが、244 については正三角形に近い形状をもち、各辺に均等な削痕や敲打痕が認められることから、あるいは製品としての形状を止めているといえるのかもしれない。

第 51 図 245 は灰白色を呈する花崗岩製の碾臼の上臼である。上面には浅いくぼみとものくばり（穀類の供給口）があり、下面には粉を碾く目（溝）と芯棒受けがある。溝は浅く不明瞭である。

３）特殊遺物（第 51 図 246・247、図版第 29）

第 51 図 246 は産地不明の陶器の火入れである。胎土はにぶい橙色を呈し、硬く焼き締まる。内面と底部外面を除き柿釉を施す。体部外面には花文様に切り抜いた型紙をのせ、その上から刷毛で淡黄色の土を刷り込んだ浮き文様を施す。口縁端部に敲打痕は見られないが、摩耗している。内面はロクロ目が顕著である。完形である。

247 は青銅製品である。上下型合わせによる扁球形を呈し、側面に継目が見られる。片面には八卦を刻む。

第４節　小　　結

地域共同研究センター棟地点の調査についてまず痛感させられたのは、地下水位が高いことによる湧水の激しさであった。第１遺構面についてはおおむね問題なく調査を実施しえたものの、第２遺構面に

ついては検出までが精一杯であり、ほとんど掘り下げを行いえない状態であった。この点は、調査方法のありようを含め早急に克服されるべき課題として浮上することとなった。また第１遺構面として取り扱った諸遺構は19世紀代のものとみなして調査を実施したが、B区西側で検出した土坑５などは17世紀代のものと認定せざるをえないことが整理の過程で判明し、調査精度に問題を残すことも明らかとなった。また遺構の性格づけについても、調査地が佐野家拝領屋敷地であるとの比定に引きずられ、検出された遺構のすべてを武家屋敷との関係によって解釈するという過ちを犯していたことも、以後の調査を重ねるなかで判明することとなった。

これら諸問題のなかで考古学的所見に関わる点については次の第４章で具体的に述べることとして、地域共同研究センター棟地点の発掘調査の成果を、前年度に実施した工学部実習棟地点の調査成果と突き合せて導くとすれば、次に列挙するような事柄を掲げることができる。

①　常三島遺跡は、武家屋敷群の遺跡として良好な遺存状態であることが判明した。その要因としては、まず第１に本地域一帯が明治期以降急速に水田化を遂げ、大規模な改変を被らなかったことが指摘できる。江戸時代を通じて武家屋敷であった地帯が明治期以降宅地としては存続せず、耕地化する現象は各地で指摘されているが、常三島遺跡はそのような事例のひとつだといえるであろう。宅地として存続しなかった最大の理由は、居住を続ける必然性が失われたという社会的環境上の変化が生じたことであるが、もうひとつの側面として、本地域一帯が徳島城下のなかでは居住環境が劣悪だったとみなしうることも無視しえない。

第２に明治・大正期に遺跡の６割強の範囲が師範学校、高等工業学校として公用地に買収されたため、その後市内全体に波及した住宅開発の波を被らなかったことである。本遺跡の依存状態が良好であることの要因としては以上の２点が指摘できる。

②　絵図・古文書が豊富に遺存しているため、発掘調査結果の細部までを比較検討することができ、これらの資料を総合することによって、屋敷地割の実態や居住者の家禄等の諸情報については正確に解明しうることが判明した。とりわけ、絵図や古文書から復元した屋敷地割と発掘調査の結果が、工学部実習棟地点と地域共同研究センター棟地点の２箇所において矛盾なく一致したことは注目すべき成果である。今後、徳島の城下町研究については、文献史学・地理学・考古学の３者からの多面的、学際的アプローチが可能であることを示した。なお、常三島地区については武家屋敷の配置関係の概要が確定できたので、工学部実習棟地点の大半は田中家拝領屋敷地区、地域共同研究センター棟地点は佐野家拝領屋敷地区と呼ぶことが可能になった。

③　出土遺物には武家層が使用した日常生活用具の一式が認められ、タイムカプセルの様相を呈している。これまでに実施した２軒の屋敷内から出土した遺物を比べると、佐野家のほうが田中家よりも「上手物」を多くもち、相対的に裕福であったことがわかる。このことから、知行石高からみると下級武士層にあたる両家ではあるが、医師であった佐野家のほうは実質的に中級武家層以上の経済状態にあったことを示す可能性がある。このような視点からみれば、今後、諸階層の武家が甘受した日常消費活動の実態が解明できるものと期待される。

④　出土遺物には中国製の磁器や朝鮮半島製の磁器（朝鮮白磁）などが含まれており、今後、こうした焼物の流通状況をより正確に解明しうるものと期待される。